

2023年1月10日

2022年度 研究活動報告書

南魚沼市八海山麓地域の風土の研究 ―地域に生きる里山伏―

指導教員

野村 朋弘

芸術環境専攻 学際デザイン研究領域

52186053

佐藤 隆彦

目次

序.....	1
第1章 南魚沼市八海山麓地域の大崎地区.....	1
第2章 地域に生きる里山伏と地域社会.....	2
1. 里山伏について 一とある修験寺院の法印一.....	2
2. 里山伏と地域社会との関係性 一大崎地区の現状一.....	2
3. 里山伏が途絶えることの影響.....	3
4. 里山伏の文化資産的価値.....	3
5. 維持継承に向けた課題と文化資産としての利活用.....	4
第3章 地域に生きる里山伏を通して見える風土	
一大崎地区の風土の一端一.....	5
結.....	5
注釈.....	7
参考文献.....	18
巻末資料.....	21

序

共同研究で考察してきた通り、八海山麓地域¹の風土²を理解するうえで「八海山」の存在は大きく³、殊に、「霊峰 八海山」として山岳信仰⁴や修験道⁵をはじめ、これらに由来する伝統文化や風習が根強く残っているなど、地域の風土に与える影響が示唆される。

また、南魚沼は山岳修行によって験力を得た山伏⁶が里（地域）に定着し、住民に身近な宗教者として活動している希少な地域⁷である。彼らは「里山伏⁸」と呼ばれ、南魚沼をはじめ一部の地域でしか残っていない⁹と言われている。

本研究では、八海山麓地域の中でも八海山の里宮¹⁰を中心に栄えてきた「大崎地区¹¹」（図 1¹²）に生きる里山伏に着目した。

里山伏と地域社会との関係性ととともに、地域の風土の背景にあるものを考察していく点に本研究の独自性・新規性¹³がある。

第 1 章 南魚沼市八海山麓地域の大崎地区

大崎地区は旧大崎村として歴史を重ねてきた地区であり、交通に恵まれず孤立した地理的環境¹⁴の中、八海山の麓の里宮を中心に町場が形成されてきた。

また、八海山からの豊富な伏流水に恵まれるなど、農業の発展を図ってきた地域であるとともに、「大崎に行けばなんでも用が足せる」と近郷から言われるなど、多種多様な職業があり、職人の村¹⁵としても栄えた。

さらに、八海山信仰に由来する文化や祭礼が根強く継承され、「大崎は宗教的な祭りに明け暮れてしていて、よくやっているな」¹⁶と他地域から言われるほどであり、旧来からのマキ¹⁷といった身近な共同体を核に、祭礼を盛んにして生活を守ってきた歴史がある。

大崎地区の地域性の特徴¹⁸は次の二点に集約されるだろう。

- ① 霊峰八海山の麓の里宮を中心に栄え、これに由来する伝統文化が根強く残ること
- ② 多数の宗教的祭礼¹⁹が残り、人が集まり、結束し、維持しようとする土壌があること

第2章 地域に生きる里山伏と地域社会

1. 里山伏について ―とある修験寺院の法印―

地域に生きる里山伏の一つの姿として、修験寺院の法印²⁰がある。大崎地区の修験寺院の法印、三寶院²¹第十八世住職・石動晃順氏の語り²²を踏まえ、現代の里山伏像を図2²³の通り整理した。

里山伏は、一人の山伏としての日々の修業や生き方に係る領域と、法印や宗教者としての地域での活動領域との二面性で整理することができるだろう。本研究では、法印や宗教者としての地域社会との関わりに着目する。

集落内の修験寺院の法印として、地域住民に対する祈祷²⁴や厄払い、日待ち²⁵等を執り行う一方で、家主らの身の上相談や悩みに寄り添い、住民に身近な宗教者として、個人はもとよりマキなどの共同体に対する「対話」を通じた救済、成長、現世利益²⁶の希求に応えてきた。

里山伏は「集落の住民と密接に関わり、対話性²⁷に特徴づけられる身近な宗教者であり、人づくり・地域づくりの中核を担ってきた」と言えるだろう。

2. 里山伏と地域社会との関係性 ―大崎地区の現状―

前掲図2の通り、里山伏と地域社会との関係性の濃淡は歴史的経過や社会状況により大きく変化していると推測され、集落の過疎化、少子・高齢化、世代交代などに伴う寺院との関係性の希薄化²⁸をはじめ、科学技術の進歩等による信仰心の衰弱²⁹などが影響していると考えられる。

また、法印らの語り³⁰や地域住民に対する聞き取り³¹を踏まえ、現代の関係性のモデルを図3³²に示す。全体として日常生活での里山伏との直接の関わりは遠ざかっている傾向³³にあるものの、地域行事や祭礼等では比較的多くの接点が残っている³⁴ことがわかった。

現在の地域住民目線では、里山伏に対して、対話による個人や共同体の救済などの側面

よりも、地域で引き継がれてきた年中行事や風習等を取り仕切り、伝統文化の維持継承の先頭に立つ人という側面が強いのではないかと考えられる。

一方で、コロナ禍の特殊事情により人が集まらず、祭礼・行事も中止となるなど、里山伏らが担ってきた伝統文化の維持継承に大きな影響³⁵を与えている。

3. 里山伏が途絶えることの影響

地区内の大崎集落に大崎院³⁶という里山伏がいたが、一昨年に住職が遷化³⁷し、里山伏が地域から途絶えた。大崎院は大崎集落で引き継がれてきた伝統的な祭礼や年中行事、風習などを取り仕切り、これらを脈々と維持継承しており、集落の住民からも同様に認識³⁸されていた。

彼の死去により、地域と里山伏との接点が途絶える³⁹とともに、前述の大崎地区の特徴の通り、地域をあげて大切に守られてきたこの地ならではの風習や八海山信仰に係る伝統行事の一部が一昨年より消滅⁴⁰した。

里山伏が途絶えることはこの地域独特の文化が途絶えることに繋がり、地域住民にとっても、今に生きる里山伏らにとっても喫緊の課題と認識⁴¹されている。

本事例は里山伏の文化資産的価値を理解するために重要であり、未来に向けて、今何を継承し、その意義は何であるのかについて大きな示唆を与えてくれる。

4. 里山伏の文化資産的価値

里山伏や地域住民からの聞き取り調査に加え、前 3. の大崎院の事例を踏まえ、里山伏の文化資産的価値を次の三点に整理した。

- ①地域住民との密接な関係性の中での対話による人づくり・地域づくり⁴²
- ②地域で引き継がれてきた独自の伝統行事や風習⁴³の維持継承と先導
- ③生活とともにある信仰や神仏への祭祀、その意味の伝承⁴⁴

先の三寶院・石動住職は、地域に生きる修験者であり、宗教者でもある自身の生き方や

地域との関係性を、「我々は対話宗である」⁴⁵と表現している。このことは、家やマキと密接に関わっての対話性は修験寺院の里山伏ならではの特徴であり、対話を介しての人づくりや地域づくりは里山伏が持つ社会的・文化的価値であることを示すものである。

さらに、大崎院の事例も踏まえると、この地に生きる里山伏は、地域独自の伝統行事や風習等を通じて、地域の風土の基層にある歴史や文化を次世代に伝えていく伝道師としての社会的価値や期待があると言える。

換言すれば、この地に生きる里山伏が残っているからこそ、今に引き継がれる伝統文化が根強く継承されてきたと言えるだろう。

5. 維持継承に向けた課題と文化資産としての利活用

聞き取り調査等を踏まえ、次の三点を指摘したい。

- ①里山伏の存在や社会的価値や機能に対する認識が弱いこと⁴⁶
- ②地域に残る独自の伝統行事や風習の文化資産的価値への理解が希薄であること⁴⁷
- ③伝統文化や風習と日常生活との関係性がわからなくなっていること⁴⁸

特に、本稿第1章、また、聞き取り調査等を踏まえると、本地区には旧来の伝統を維持しようとする地域性が観察できる一方で、時代の変化や宗教的行事の継承に対する意識の希薄化⁴⁹、地域に対する若者からの敬遠の声⁵⁰など、地域全体としての課題も背景にあるのではないかと考えられる。

これらの課題を解決していくためには、地域の文化資産に対する「外部からの価値づけ⁵¹」に加え、「地域の人自身が知り、地域の人々の文脈で次世代に語り継ぐこと」や「郷土に誇りを持ち、郷土の自慢として話し、伝えられること」⁵²が必要である。

この地区の社会資源に、大崎小学校支援本部⁵³や地域づくり協議会⁵⁴の場がある。こういった場で住民自身が地域の伝統や文化に気づき⁵⁵、世代を超えてこれらについての対話ができるようなコミュニケーションツールが必要であると考えられる。一例として、「八海山と伝統文化」という視点で、大崎地区に特化した小学生向け小冊子を試作⁵⁶した。テス

ト・検証及び改良は今後の継続課題としたい。

なお、里山伏自身が積極的に自らの社会的価値や役割等を語っていく必要があることは言うまでもない⁵⁷。

第3章 地域に生きる里山伏を通して見える風土 —大崎地区の風土の一端—

大崎地区では里山伏が先導し、地域をあげて守られてきた特徴的な風習や行事⁵⁸が残っている。現地で里山伏や地域住民と幾度となく出会い、地域の風土についての対話⁵⁹をし、これを顧みたとき、大崎地区の風土を形作る背景の一端には、「一定の伝統的な宗教的風土のもとに引き継がれてきた暮らしや文化を、みんなでなんとか守っていこうといった覚悟と意地」があるのではないかと考えている。

この土台には次の三つの要素が考えられる。

①八海山信仰や山伏に由来する、この地ならではの伝統や習俗が根強く残る暮らしを、マキなどの身近な共同体を母体に守ってきているという「自負」⁶⁰

②自然環境と対峙する中での、「しょうがねえ」といった諦観の念を持つ一方で、「他には負けらんね」などといった「意地」や「見栄」⁶¹

③時代の流れといえども、「簡単にやめらんね」、「しねばなんねんだ⁶²」といった「覚悟」を背景にした「結束」と「協働」⁶³

これらは大崎地区の地理的特徴や雪国という自然環境と対峙する中で、自分たちの生活に取り込みながら育ててきた、地域社会にある言語化されていない無意識の地域像であり、地域の風土を形成する一端に存在するものだと考えられる。

結

里山伏は生活に密着し、人や共同体との対話を拠り所にした身近な宗教者として、覚悟⁶⁴をもって人づくりや地域づくりを担ってきた。

さらに、地域の文化や習俗、民俗宗教⁶⁵の指導者であり、生活の中での祈りの場を通し

て、住民と直接対話しながら地域文化の維持継承を担ってきた。

また、大崎院の事例から、里山伏が途絶えることの影響とともに、ここから何を学び、何を継承していくべきかを検討してきた。

里山伏や彼らが残る地域を再評価することは、廃れゆく地域の文化や風土を再発見し、次世代に継承していくきっかけとしての意義がある。

本研究では八海山麓地域の一部の地区に焦点を当てて検討してきた。今後は他の地区の里山伏の現状把握や比較・検討を行い、より立体的に現代の里山伏の社会的機能や価値を明らかにするとともに、地域との関係性から風土を捉えていくべく、以降の課題とした。
い。(3,998字)

注釈

¹ 日々の暮らしの中に八海山が望める地域（丘陵など高い場所に登らなくても自然に八海山を目にすることのできる地域）であり、八海山からの視点場や地理的特性を考慮し、共同研究及び本研究において、図1（巻末資料 p. 22）のとおり、独自に定義した地域である。この地域を「八海の国」とし、現南魚沼市合併以前の旧町及び旧地区をもとに境界を設定した。

地区境界の設定は、まちづくりの基幹及び自治組織として地域住民にも認識されている12地区の地域づくり協議会の境界をもとに、浦佐地区、大崎地区、東地区、蕨神地区（以上、旧大和町）、大巻地区、城内地区（以上、旧六日町の一部）を本研究における「八海山麓地域（八海の国）」として設定した。

² 共同研究において、「風土とは、地域の人と自然の関係が生み出した、その地域特有の文化や生活様式・気質などが、地域外の人と交わることによって形作られるもの」と定義し、研究を進めてきた（巻末資料 p. 34）。地域の風土については第3章で詳述する。

³ 南魚沼市教育委員会『大和町の近・現代』南魚沼市教育委員会、2020、p. 569。

本書では八海山麓地域の大部分を占める旧大和町の前身である、旧大和村の命名の経緯が記録されており、八海山と地域とのつながりに示唆的な記述がある。

「四か村に最もつながりの深いのは、なんといっても八海山であります。八海山は霊峰といわれるとおり、遠い蒲原地方からも信者が訪れる、信仰の山であります。八海山を村の鎮守として祭っている大家もいくらかあります。…この霊峰八海山の戸口にある村、すなわち山の戸口にある村、山戸村という名前をつけてはどうでしょうか。しかし、この「山戸」ではどうも味わいが薄いので、これをもじって「大和村」大きな和を持って運営する村ということではいかがなものでしょうか。」

旧大和村への合併協議会では、旧東村からこの案が提案され、採択され、「大和村」が誕生した。」

上記は旧大和村への合併協議会に諮るための、旧東村から提出された命名案が「大和村」の誕生に至った旨の記載であるが、八海山と地域とのつながりや、八海山麓地域のエリア設定の妥当性を支持するものと捉えることができる。

⁴ 鈴木正崇『山岳信仰 日本文化の根底を探る』中公新書、2015、pp. 3-4。

鈴木は、山岳信仰について「山に対して畏敬の念を抱き、神聖視して崇拜し儀礼を執行する信仰形態」とし、山岳信仰は日本で生活する人の精神文化を育み、思想や芸能など、あらゆる分野に大きな役割を果たし、崇拜対象となったものであると整理している。

また、「山を祀り、登拝して祈願し、祭祀芸能を奉納した。人びとは、神霊が降臨する山、神霊が鎮まる山、仏菩薩の居ます山、神霊の顕現としての山、霊山、霊場、聖地とされた山との共感を通じて、日々の生活を見つめ直し、新たな生き方を発見した。山は蘇りの場として機能してきたのである。」とし、山への畏敬と神聖化が山岳信仰の根本であることを示している。

なお、山岳信仰及び八海山信仰の特徴については、参考文献を踏まえ、巻末資料 p. 25 に整理（筆者）した。

⁵ 宮家準『修験道小辞典』法藏院、2015、p. 1。

宮家は、「修験道は、日本古来の山岳信仰が、外来の仏教・道教・シャマニズム、神社

神道などと習合して、鎌倉時代初期に成立した。そして、修験者・山伏の霊山などでの修行と、それによって得た験力に基づく宗教活動を中核としている。」とし、更に、「修験道は特定宗派というより、山岳修行とそれによる験力の獲得をめざす「道」ともいえる性格を持っている。」と定義している。

なお、修験道の思想・儀礼と歴史については、参考文献を踏まえ、巻末資料 p. 26 に整理（筆者）した。

6 和歌森太郎『山伏 一入峰・修行・呪法』中央公論新社、2002、pp. 3-4 及び p. 40。

和歌森は、「山伏とは、定義をつければ、山岳に登拝修行し、そこで体得した験力をもって、加持祈祷の呪法を行う行者である。」と定義している。

また、「実際、山伏の、日本の民衆生活を指導し、これに影響を与えた度合いはまことに深いものがある。山伏は宗教的呪術師であったのみならず、芸能の導入者であり、演出家であり、また医者、あるいは何事につけても村人の相談役であった。彼らは一面では薄気味悪い、一面ではたのもしく、畏敬されるものであった。」とし、山伏の地域社会における役割や価値を指摘している。

7 宮家準編『修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道—』名著出版、1981、p. ii。

「新潟県南魚沼郡は、金城山、巻機山、苗場山、八海山などの霊山にかこまれ、現在でも旧村に一人ずつ位の山伏がいて活躍している全国でもめずらしい地域である。しかも同郡の湯沢町、六日町、大和町などの諸町村では、修験者仲間の組織すら作られている。」とし、修験者らが活発に活動する地域であることを指摘している。

8 宮家準『修験道辞典』東京堂出版、1986、pp. 144-155。

「山伏の一形態で里修験ともいう。（中略）里山伏は、地域社会の人々から法印様・別当様・山伏様などと呼ばれ、民間信仰のなかで指導的役割を果たしてきた。（中略）一般に現世利益的領域においてその力を発揮し、治病や除災などは里山伏が一手に引き受けてきたと称しても過言ではない。里山伏と地域社会と宗教とのかかわり方は、ムラ・家・個人と異なった三つのレベルに分けることができ、その宗教活動は庶民の日常生活全般に及んでいる。」

なお、里修験については、宮本（宮本袈裟雄『里修験の研究』吉川弘文館、1984）が研究史上において積極的な評価を行い、修験道の担い手である山伏の修業の場の特性（山岳と里）と行動特性（移動性と定着性）から、四つの類型に分け、宮本が定義する「IV型」と言われる「里修験型」の特性を持つ修験者を里修験と定義している。

また、「里修験については、それが里に依拠し、定着性の顕著な修験者で修験道の一形態であること、修験道史の展開と対比させるならば、ほぼ近世期以降の修験道に該当する」としている（宮本（1984）、pp. 2-5）。

9 「この地域の特徴は、そうした修験寺院や里山伏が「残っている」というところに特徴があるんですな。里山伏としてもここが一番多く残っている。宗派がちがっても同様の傾向で、南魚沼が一番多い。特に山間部に多くのこっているという所を見ると、神仏分離による影響が甘かったというのもあるかもしれない。平野部にはもう残っていないはずだ。」「山伏は修行している人のこと。里山伏は地域に土着して、地域の人たちの信仰の対象になったわけだ。それで里山伏と呼ばれている。里山伏っていう呼ばれ方は南魚沼と高知県くらいだ。同じ四国でも高知県だけだな。高知県は一般的な信仰というだけあって少し違うんだな。高知県は、普通の寺院と違って、檀那寺の役割をしている。葬式をやるんだな。（中略）里山伏ということで考えると、南魚沼は貴重だということですか。」（快蔵院・雲尾住職、巻末資料 pp. 45-46）。

10 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 “里宮” <https://japan.eb.com/rg/article-04618500> (2022年12月31日最終閲覧)。

「一つの神社であって2カ所以上に神殿のある場合、山上の奥宮、山宮に対して、ふもとの里にある宮をいう。」

研究エリアの大崎地区は、八海山信仰の霊場である八海山尊神社の里宮を中心に町場が形成されてきた歴史がある。

11 南魚沼市市民課「南魚沼市行政区別人口集計表」、南魚沼市ホームページ、<https://www.city.minamiuonuma.niigata.jp/docs/5943.html> (2023年1月7日最終閲覧)。

大崎地区は16の行政区から構成され、地区人口3,070人・1,219世帯である。共同研究でも触れてきた通り、次世代への郷土教育をターゲットとした際には、小学校区を単位とした検討をすることで、より地域に根差した提案ができると考え、地区を構成する16の行政区の内、八色原(赤石小学校区)と国際町(浦佐小学校区)を除いた、大崎小学校区となる14の行政区(上一、上二、平沢、原小路、寺中、横、下一、下二、水尾、柳古新田、今町新田、海士ケ島新田、穴地、穴地新田)を本研究の対象エリアとし、以降、「大崎地区」と表記する。

なお、上記の14の行政区は、旧大崎村の範囲とも合致(大崎の村誌編集委員会『大崎の村誌』大和町大字大崎区、1978、p.1)しており、妥当性があると言える。

12 巻末資料 p.22 のとおり。

13 南魚沼の修験道に関する総括的な先行研究は、宮家(宮家準編『修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道—』名著出版、1981)の研究報告以降、確認できていない。

また、八海山麓地域の大崎地区に生きる里山伏に焦点をあてた質的研究についても、現時点では確認できない。

宮家(1981)の調査から四半世紀以上経過しており、時代背景が大きく変わった令和の現代と当時とは諸相が変化していると思われる。本研究は、八海山麓地域の里山伏と地域社会との関わりとともに、風土との関連性に着目した質的研究としての独自性・新規性がある。

14 大崎地区は、交通に恵まれず、山々に囲まれた、比較的狭い地域に人口が密集している地域である。

東に八海山がそびえ、その支脈が南へ延び六万騎山に至り、北は権現山を連ね方谷山となり、三方を山々に囲まれた地域である。魚野川を望む盆地の中心に大崎地区がある。

また、権現山の北東には穴地、穴地新田、方谷山の突端に柳古新田、魚野川流域に海士ケ島新田があり、地区の西側には水尾、水尾新田、今町新田があり、これらが旧大崎村を構成していた。

(参考：大崎の村誌編集委員会『大崎の村誌』大和町大字大崎区、1978、pp.1及び大崎地区地図(表紙裏差し込み))

15 「大崎は職人のまちだったんで、そういうことから、他と比べてほんとなつながりが強いところだと思う。お祓いもそうだし、冠婚葬祭含めて、みんなマキ単位でやっていた。」(大崎地区在住・60代男性、巻末資料 p.54)

「この地区にはこんな小さいところに飲み屋がたくさんあったんだよね。仕出し屋とかも多かった。大和のほかの地区とは違うよね。大崎ってのは昔から職人の多い村だった。部落で家が一軒建つくらいの職人がいる。」(大崎地区出身・50代男性、巻末資料 p.58)など。

16 「大崎はほんとに祭りの多いところ。いっつも祭りやっている地区だな。浦佐も多いかもしれないが、大崎はほんとに多い。そういうところが逆に嫌われている。祭礼のたびに金銭的な負担もある。大崎地区は飲み屋がいっぱいあった。大きな宴会ができる場所が、こんなちっちゃいところに、寿司屋が2件、芸者小屋もあった。集まって賑やかにやるのが好きなんだろうし、そういう風習があるんだろうな。」(大崎地区在住・60代男性、巻末資料 p. 54)

「大崎は祭が多い。年中祭りやっている感じだよ。そういう意味でも、八海山信仰とか山伏とかとも繋がりが濃い地域だと思うよね。地域がガッチリ繋がっている。」「大崎もそうだけど、八海山麓地域は信仰との関わりが大きいよね。それに絡んで祭りがそこら中でやられている。」(大崎地区在住・60代女性、巻末資料 p. 57) など。

「大崎は祭が多いな。年男が神輿担いで行くってのがずっと続いている。世代によって役割がだいたい決まっている。寺の祭り、神社の祭り、その他祭礼がたくさんある。何かにしろ祭りで、それに伴う集まりも多い。大崎ってところは八海山の社務所があって、そこから発展した部落だって言いますよね。だから信仰とか山伏とかは割となじみがある地域かなと思うな。」(大崎地区出身 50代男性、巻末資料 p. 58)

17 南魚沼市教育委員会『六日町史 民俗』南魚沼市教育委員会、2021、p.187。

「マキは「巻」の字が当てられることもあり、通常、村落内で父系をたどる形で家々を系譜づけた一まとまりの社会集団」とされ、「本家分家関係が意識されている家々のつながりの総体」である。大久保マキ、松田マキなど、生活する上での身近な共同体である。

18 大崎の地域性の特徴については、参考文献を踏まえ、巻末資料 p.27 に整理（筆者）した。

19 大崎地区の宗教的祭礼に係る主な年中行事（巻末資料 p. 79）

20 宮家準 編『修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道—』名著出版、1981、p. 166。

「南魚沼郡内では、一般に神官のことを「太夫様」と呼んでいる。また、修験寺院については「法印様」という名称が一般的である。そして、葬儀をとり行う菩提寺（檀那寺）の方は、寺院名を呼ぶことが多いが、通称は「お寺様」である。」とし、現在でも地域の中でも区別（大崎地区では、修験寺院の三寶院や大崎院は「法印様」、八海山尊神社の宮司は「太夫様（又は神主様）」、菩提寺となる龍谷寺は「龍谷寺様（又はお寺様）」して呼ばれている。

21 大崎の村誌編集委員会『大崎の村誌』大和町大字大崎区、1978、pp. 370-371。

石動山三寶院は大崎地区の穴地新田にある本山修験宗（総本山・京都聖護院門跡）の寺院で、鎌倉時代末期、加賀の国の法城・石動山にその由縁を持っている。現住職は第十八代目の石動晃順氏である。本尊は不動明王で、神変大菩薩、智證大師像が祀られている。

檀家は、過去には旧大崎村を中心に旧東村、旧浦佐村にまで広がっていた（宮家準編『修験者と地域社会—新潟県南魚沼の修験道—』名著出版、1978、p. 67 表）。

現在でも約 180 の檀家を持つが、現住職が就任した 45 年前（1977 年）には、約 230 軒の檀家があったとのことであり、三寶院が所蔵する古文書によれば、過去の最盛期には年間 5,000 件もの祈祷を行っていた記録がある。（三寶院・石動住職、巻末資料 pp. 36-43）

22 巻末資料 pp.36-43 のとおり。

23 巻末資料 p. 23 のとおり。

24 種々の参考文献に記載されている通り、江戸時代の幕府政策により修験者の宗教活動は近世初頭より祈祷を中心に規制されてきた歴史がある（巻末資料 p. 26）。

25 宮家準『修験道小辞典』法藏館、2015、p. 152。

「修験道では山伏が檀家の家をまわり、護摩祈祷をしたり、御札を配ったり、各家の神を祀る行事を日待と呼んだ。」と定義されている。

柳田國男監修『民俗学辞典』東京堂出版、1951、p. 439。

「日待は本来太陽を拝む原始信仰に淵源を持つとされ、夜のおこもりをして日の出を待ったことから日待と呼ばれるようになったといわれている。」とし、原始からの自然信仰に由来するものであると言える。

南魚沼においても、ほとんどの修験寺院が行っており、寺院によって差はあるが、新春の1月から3月いっぱいにかけて村々を巡り、家の祈祷をするものである。日待と同時に、荒神祭りや星祭り、内鎮守の祭りを一緒に行う場合もあり、日常生活を守護するための祈祷を行うものである。里山伏としての重要な活動の一つである。

本研究で取り上げている三寶院（石動住職）では約180の檀家があり（令和4年10月10日時点）、1月～3月の間で各家々を回るとのことであり、雪中の時季を考慮すると相当な苦勞が推測される（三寶院・石動住職、巻末資料 pp. 36-43）。

26 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 “現世利益” <https://japan.eb.com/rg/article-03752000>（2022年12月28日閲覧）。

「仏教用語。経を読み、真言を称え、念仏することなどによってもたらされる、この世で受ける仏、菩薩などの恵み。この恵みを受けるために祈るのを現世祈祷といい、密教では種々の修法を行う。」とあり、里山伏は、住民の現世利益的な希求に応えるべく、加持祈祷、呪法、巫術などの呪術宗教的な活動をし、現在でも変わらず継承されている。

27 「地域の身近な「対話宗」（石動住職の造語）でいること、地域に生きる修験者として大事な役割だと思う。そのために修行をして、力を身につけ、地域に貢献していかんばと思っている。宗教の「宗」は分解すると、家の中で教えるとなる。家族などの中に入り込んで、そこで人の話を聞いて、対話をする。そんな役目が宗教者にはあるのだと思う。」（三寶院・石動住職、巻末資料 p. 39）

「昔は泊りがけで行って、いろりを囲んでその家の方を囲んで対話をしていた。（中略）家族とかマキの中に入って対話をするのが大事。これを残していきたいというわけだな。」（快蔵院・雲尾保喜住職、巻末資料 p. 46）

また、前掲・注釈6の通り「何事につけても村人の相談役であった。彼らは一面では薄気味悪い、一面ではたのもしく、畏敬されるものであった。」（和歌森（2002））とあるように、民衆生活の指導者であり、住民の相談役であるなど、対話を拠り所にした独自の役割を持っていたことが示されている。

28 個々の寺院の檀家数の推移などに係る経時的な記録はないが、三寶院では、現住職が就任した45年前（1977年）は約230件あった檀家は、現在では約180軒に減少しているとのことである。（三寶院・石動住職、巻末資料 p. 37）

29 「あと50年くらいすると、この地域に限らずであるが、宗教文化時代がなくなってしまわないかと危機感を持っている。」（三寶院・石動住職、巻末資料 p. 37）

「生活と信仰が一致しなくなった。生活の中に信仰が入っているという意識さえなくなったのかもしれない。いろいろなものに神仏がいて拝むということに関わりがなくなった

のかもしれないですな。」(快蔵院・雲尾住職、巻末資料 p. 45)

「お祈りしなくてもよくなった。信仰でなくなったんですね。修験者、法印さんとしてもその人を信仰していると言われ、その人に会って話がしたいという思いに応えていかないとならない。これが大切だ。」(満願寺・栗田住職、巻末資料 p.49) 等、寺院との関係性の希薄化や信仰心の衰弱が、当事者の声にも反映されている。

30 巻末資料 pp. 35-58 に全文を掲載。

31 巻末資料 pp. 59-69 に全集計結果を掲載。

32 巻末資料 p.24 のとおり。

33 当然に、檀徒など強固なつながりを維持している家やマキも存在するが、筆者の行った聞き取りやアンケート調査の結果から推察すると、家々の日常生活における里山伏との関係性は遠ざかっていると考えられる。

34 巻末資料 pp. 35-58 (聞き取り調査記録) 及び巻末資料 pp. 59-69 (「地域に生きる里山伏」) についてのアンケート調査、特に Q11 及び Q12)。

「この地区に限ってということであれば、山伏の姿を見ることも割とあるので、子どもでも知ってると思う。なんせ、火渡祭は地域をあげてやっている。学校が休みになって、学校でもこの日のために、鼓笛の練習したり、意味をちゃんと教えているようだし。」(地域づくり協議会職員・60代男性、巻末資料 p. 51)

「この辺の人は山伏っていえばわかる。昔は悩みごとの相談もしていたし、いろんな行事ででてくるのでわかる。子どもたちも山伏の姿は火渡祭でみているし、その日は学校も休みで、鼓笛隊として参加している。」(大崎在住・60代男性、巻末資料 p. 54)

「山伏は地域の火渡り祭で子どもたちも含めてみる。4～6年は全員出席するようになってる。そこに行く人は山伏について知っていると思う。他の学校の子はわからないだろう。そういうところで、よく見ている。総合の授業でも、修験寺院や山伏について資料を作って教えている。地域の伝統行事はかなり積極的に教えている。様々な学校に努めてきたが、地域の学習が他に比べて非常に多いのがこの学校の特徴だと思う。自慢できる地域資源が非常に多いのが特徴で、こういった個々のものつながりが分かるととてもおもしろいですよね。」(小学校校長・50代女性、巻末資料 p. 56)

35 「人口減少、コロナもあって、集まる場所もなくなり、対話もなくなった。行事もなくなり我々が懸念していることが急速に進んでいる。修験会という組織があった。コロナ前までは定期的にやっていた。5月頃から年末にかけて、寄合をやって、勉強会をしていたのだけど、コロナがあってなんだか本格的になくなったね。祭礼も行事もなくなり、修験会もなくなり、山伏も集まる機会がなくなり、そういう危機感が多い。」(三寶院・石動住職、巻末資料 p. 40)

「コロナがあって普段の活動への影響は大きな影響を受けている。あとは近代化ということも重なった。後払いは今はやらなくなったし、お日待ちも減ることはあっても、増えることはない。」(快蔵院・雲尾住職、巻末資料 p. 46)

「コロナもあり、集まる場所もなくなり、一堂に会する機会がなくなった。行事や家々に集まって相談事をする機会もなくなった。」(満願寺・栗田住職、巻末資料 p. 49)

「コロナにより修行や行事自体がなくなった。なんだかぼっかり穴が開いた感じがしている。」(快慶院・今成住職、p. 44)

上記のとおり、行事や家々に集まって相談事をする機会や修験者同士が情報交換する機会さえもなくなり、自然消滅という形で衰退しており、地域住民との接点のみならず、修

験者同士の横のつながりの場にも大きな影響を与えている。

コロナ禍という社会的背景が里山伏や地域社会との関係性に与えた影響について、文化資産の維持継承という側面から別途調査する必要があるのではないかと考える。

36 大久保悟道『水上山大崎院寺院史』大崎院所蔵（非公開）、2020、p. 41 及び p. 49。

「修験宗本山派 水上山大崎院は、京都市左京区にある修験宗本山派 総本山聖護院の末寺である。大崎院の開基については、修験宗本山派の修験瀧本坊であることは立証されているものの、年代的に確証たる記録は残されていない、諸説が流布されているものの、確立したものはない。」とされる。

なお、同史に「因みに、「新潟県大和町史中巻」に所蔵されてある、大崎院の記事は、誤説が多く、その真実性は疑わしいものが多く、執筆者の短絡的な発想によるものであると指摘しておく。」とある。

大崎の村誌編集委員会『大崎の村誌』大和町大字大崎区、1978、pp. 369-370。

水上山大崎院の由縁は、南北朝時代、越前の国の新田一族にその由縁がある。現在同院の残る古碑は、正平7年（1352年）と刻まれていることから見て、本院はそれ以前か、その当時に開山されたものと考えられている。第二十代住職の大久保悟道法印が2021年9月に遷化（巻末資料 p. 28）されたことに伴い、現在住職は不在であり、寺院としての活動はなされていない。

本尊は不動明王で、神変大菩薩、大黒尊天八海山大神、吉祥天女人などを祭り、毎年4月28日に例祭（不動明王春季大祭・滝谷の清水お不動様春祭り）を行ってきた。2022年からは住職不在につき執り行われていない。

37 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 “遷化” <https://japan.eb.com/rg/article-06508100>（2022年12月28日閲覧）。

「大乘仏教で、菩薩が身体を他の世界に移して衆生を教化することをいう。転じて、高僧の死に用いる。」

里山伏である水上山 大崎院の第二十代住職・大久保悟氏が2021年9月に遷化し、集落で維持継承されてきた行事や祭礼の一部が実施されなくなり、長らくの伝統が途絶えた（巻末資料 p. 28）。

ただ、正式に廃寺にはなっていないが、後継者もおらず、寺院としての活動は実質的には行われていない。

38 「この地域ではなんかあると山伏が先達してホラ貝吹いて回っていた。だから地域の人にはみている。そういえば最近聴かなくなったな。なんかの時には法印さんが出てきて姿を見せていた。大崎院さんがやっていたんだよな。息子が死んでなかったら、大崎院さんも続いていたんだろうな。」（大崎地区在住・60代男性、巻末資料 p. 51）

「大崎院の住職が亡くなったので、山伏行事もなくなったんで、地域でも見るのがなくなったね。大崎院さんが亡くなることで、大崎院さんがやっていた大事な行事がなくなってしまった。山伏行事ではないけど、大前神社の奥にある水源に、水の神様が祀ってある。大崎院といえば水の神様、八海山信仰とも関わりがある。地域にとっては昔からの大事な行事なんだけど、これを今度は誰が引き継ぐのか、それとももうやらないのか。」（大崎在住・60代女性、巻末資料 p. 56）

「集落では法印さんが地域を回ってお札を届ける。これを大々的にやってるのは大崎だけなんだよな。「ものもー」ってのがそうなんだよな。お寺もやるけど、部落の全部の家をまわるんだよな。これはずっとやってた。ただ、この部落では大崎院さんが亡くなってから法印さんののは去年からなくなったよな。行事やらなくなるとわからなくなるよな。」（大

崎地区出身・50代男性、巻末資料 p. 58))

39 「この辺の山伏は、三寶院さんと大崎院さんだな。寺院の法印さんは、お寺さんとは違うように認識している。法印さんはもう少し狭い範囲だな。三寶院さんが言っているように、山伏さんと家族やマキは近い存在だったな。大崎院さんが亡くなってから、この辺じゃなくなったな。この辺の人は山伏っていえばわかる。昔は悩みごとの相談もしていたし、いろんな行事ででてくるのでわかる。」(大崎在住・60代男性)

40 地域の里山伏が途絶えることの影響について、巻末資料 p. 28 に整理した。

41 「ここは里山伏が残る貴重な地域であって、里山伏もどう乗り越えるかは、皆が壁に突き当たっている。大崎院さんの件はこれから我々が直面する典型的な姿だろう。」(三寶院・石動住職、巻末資料 p. 40)

「八海山を取り巻くと言えば大崎院だな。ここは水の神、水源を守っていたんだな。大前神社のところの奥にある。役行者の石碑とかが建っている。これを大崎院が取り仕切っていた。もう彼が亡くなったから寺院としてはなんもできない。」(快蔵院・雲尾住職、巻末資料 p. 46)

上記の通り、その地域に固有かつ、八海山信仰や修験者にとっても重要な祭礼の一つが途絶えたことになる。後継者もない中、復活の目途はたっていない。

42 注釈 26 及び聞き取り調査記録(巻末資料 pp. 35-58) 等からも、上記のように、身近な地域や共同体の中で、家族や親戚等でなく、話を聴きながら一緒に課題解決を支援するといった、身近な第三者と対話による、いわば斜めの密接な関係性が里山伏の価値の本質ではないだろうか。

また、法印自身も住民との対話の先にある、人づくり・地域づくりの重要性とともに、修験者としての覚悟に触れている。

「おれはとにかく山伏をやめようと思っていたが、26歳の時に、お日待ちの時に年配者からたくさん教わって今に至る。わが身を捨てて人を育てる。部落の中でも、信徒に対しても悪いことはハッキリいうことにしている。これが宗教者の役割であり、いい人間をつくり、人づくりをしていかんばならんと思う。修験者はその家と人とも濃く、密接だ。お寺さんはビジネス的になっている中で、修験者はその地域や家と密接だからできるんだと思う。修験者が地域でしてきたのは人づくりだとつくづく思う。修験者と信徒との触れ合える時間が長いことがいいところなんだと思う。そういう時間の中で、生活の作法とかマナーとか、親が子どもに伝えたり、そういう人としての作法を教えていたんだと思う。」(三寶院・石動住職、巻末資料 p. 41)

43 巻末資料 pp. 73-76 に大崎地区で引き継がれてきた独自の伝統行事や風習の一部を整理した。

44 「2日は、逆に私の方から年始のあいさつに伺う。子どもをお供につけて、ものも一という。「物申す」というということだな。あいては「どうれー」、どうした一という意味だけど、それを受けて、お盆にお札をのせて、子どもがお札を配る。この部落では全部やっている。応答についても私から意味を伝える。そうすると若い人もちゃんとやってくれる。こういうことをする中で子どもらも意味を理解して、教育されていく。自分の役目を理解して、回ってくれている。子どもに意味をしっかりと教えることが大事である。子どもの声その家に元気を与え、神様仏様に届く。だから、意味が分からんでしているのと意味が分かってしているとは全然違う。」(三寶院・石動住職、巻末資料 p. 41)

45 前掲、注釈 26 のとおり。

再掲。「地域の身近な「対話宗」（註：石動住職の造語）でいること、地域に生きる修験者として大事な役割だと思う。そのために修行をして、力を身につけ、地域に貢献しているかんばと思っている。宗教の「宗」は分解すると、家の中で教えるとなる。家族などの中に入り込んで、そこで人の話を聞いて、対話をする。そんな役目が宗教者にはあるのだと思う。」（三寶院・石動住職、巻末資料 p. 39）

46 「地域に生きる里山伏」についてのアンケート調査（巻末資料 pp.59-69）の Q7-Q10、Q13 の回答のとおり。ただし、他地域との比較まで聴取できていないため、里山伏の存在や社会的価値への認識が比較の上で顕著に低いとは言えないが、凡その傾向を把握することはできる。

一方で、全体として 40%弱の人は何らかの記憶に残っていると見え、地域性との関わりは無視できないものと思慮される。

47 「以前は、御祈禱行ってそのあとに家族と対話していたが、最近の世代は、御祈禱してすぐ解散ということになっている。建築様式の変化も大きい。和室がない、神棚もおけない。文化的な要素もなくなっていく。そうすると生活の中からそういう文化が消えていく。職人もいなくなる。それに伴って文化もなくなる。」（三寶院・石動住職、）

「若者の宗教心も薄れてきており、昔のような地域での活動はだんだん少なくなってきているのが現実である。今後数十年たつと、修験や山伏ということ自体が忘れ去られていくのかという危機感も持っている。人々の昔ながらの自然に対する宗教心が薄らいでいっているように思う。」（快慶院・今成住職）

また、「地域に生きる里山伏」についてのアンケート調査（巻末資料 pp.59-69）の Q14 の回答にある通り、積極的に維持継承していこうという考えは約 34%、約 32%の人は「わからない」又は「優先度は低い」という回答である。

48 「新しい人や新しい世代が増えてそういうのが減ってきたし、神棚のない家が増えて来て、土俗的なことをしなくなってきたな。生活と信仰が一致しなくなった。生活の中に信仰が入っているという意識さえなくなったのかもしれない。いろいろなものに神仏がいて拜むということに関わりがなくなったのかもしれないですな。近代化されてない時点では、何かにはすがって生きていくのが庶民だった。絶えず何かを守られている、そういう感覚だったんだけど、今はもうそういう感覚でなくなったのかなということですか。」

（快蔵院・雲尾住職）

「自慢できる地域資源が非常に多いのが特徴で、こういった個々のもののつながりが分かることもおもしろいですよね。」（小学校長・50代女性、巻末資料 p. 56）

49 「地域に生きる里山伏」についてのアンケート調査（巻末資料 pp.59-69）の Q12（地域社会での宗教的行事等への関与について）によると、48%程度の人が、「そもそも宗教行事として意識したことはない」、「伝統や風習だから（なんとなく）続けている」といった回答をしている（巻末資料 p. 65）。

また、前掲注釈 46 で記載した、アンケート調査の Q14 の回答も参考になる。

50 「大崎はほんとに祭りの多いところ。いっつも祭りやっている地区だな。浦佐も多いかもしれないが、大崎はほんとに多い。そういうところが逆に嫌われている。祭礼のたびに金銭的な負担もある。最近新しく移住してきた人が 1 件ある。ただ、大崎って若者から嫌われている。祭りが多し、集金も多いし、付き合いも深い。」（大崎在住・60代男性、巻末資料 p.54）

「地域がガッチリ繋がっている。それで逆に嫌われるというのはあるかも。祭礼費もあるしね。」（大崎地区在住・60代女性、巻末資料 p.57）

51 「南魚沼が貴重だというのは知らなかった。地元にいるとなかなかわからない。外から言ってもらえるとわかる。」(小学校長・50代女性、巻末資料 p. 56)

「外部からの価値付けってとてもいいのかなと思う。そうやって気づくというのも大事かなと思う。逆にそうじゃないと気づかないと思う。地元は当たり前だと思っていやっている。大崎ってところは、子どもらが誇りを持ちやすい地域だと思います。それに気づいてもらうことが大事なのかなって思います。自分たちの地域ってすごいんだなと思ってもらえればいいのかな。こうしてやっぱり外部から改めて価値づけしてくれることが大事なんだと感じます。今のあなたのお話で大崎のすばらしさをこういうふうに改めて気づけたことはとてもありがたいことです。」(大崎地区在住・60代女性、巻末資料 p. 57)

52 共同研究における風土記の方向性(巻末資料 pp. 30-32)を踏まえ、個人としての社会提案の方向性を示した。

53 南魚沼市立大崎小学校 HP、

<https://www3.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=1510008> (2023年1月1日最終閲覧)及び巻末資料 pp. 70-71 (はなさきプラン組織図)のとおり、大崎小学校では、学校支援地域本部事業として平成20年度から取り組んでいる事業であり、先進モデル校として文部科学大臣から表彰(「優れた「地域による学校支援活動」推進にかかる文部科学大臣表彰」)を受けた経緯(文部科学省生涯学習政策局初等中等教育局『地域による学校支援活動事例集 平成25年度』文部科学省、2013、p. 51(巻末資料 p.72))もある。

また、巻末資料 pp. 35-58(聞き取り調査記録)中、大崎小学校校長及び大崎小学校地域コーディネーターからの聞き取り(巻末資料 pp. 56-57)を参照されたい。

「様々な小学校で勤務してきましたが、大崎小学校って、地域のほうから学校にどんどん入ってきている地域で、県内でも先駆的になっている。それで、大臣賞ももらっている。その方たちがいるので地域のことを学ぶ土壌がある。全国でも先駆的なところである。」(大崎小学校校長・50代女性)

54 南魚沼市の指導のもとに成立した自治活動組織で、市内の各地区に12の「地域づくり協議会」があり、それぞれの地域でやりたいことや課題を解決するためにさまざまな活動を行っている。旧三町を構成していた旧村地区を1つの単位として、地域づくり協議会を設置し事業を実施しており、各地区に「地区センター」を置き、事務局が置かれている。

「大崎地区地域づくり協議会」は旧大崎村地区一帯を管轄し、大崎地区の地域課題の解決や自主的な自治活動の取り組みの総合調整機能を担っている(参考:南魚沼市U&Iときめき課『南魚沼市地域づくり協議会概要—地域づくり協議会の活動事例』南魚沼市U&Iときめき課、2020)

55 地域住民に対するアンケート調査(巻末資料 pp.59-69)における自由回答(巻末資料 p.69)にも次のような回答がある。

「この地域の独自の風土や文化であるという認識を市民自身が持って、守っていかねければ衰退して消えてしまうということを感じます。」

「当たり前のように過ごしていると、八海山麓地域の独自の風土や文化についての情報を得る機会が少ないので、地元の人でも知らないことが多い。世代が下がるにつれ、そういったことを知る機会が少ないと思うので、若い世代に知ってもらうことで風土や文化が守られるように思う。」

56 個人としての社会提案の方向性(巻末資料 pp. 31-33)を踏まえ、「おおさきのたからもの」(巻末資料 pp. 73-78)として試作した。

57 コロナ禍以降の「新しい日常」と言われる中、里山伏との新たな関係性の構築を模索していくにあたり、南魚沼市塩沢の里山伏・萬学院の田村住職からの聞き取り（巻末資料 p. 29）が示唆的である。SNS などの新技術を活用した地域の外に向けた「発信」とともに、外部からの価値づけの大切さが伺える。

また、コロナ禍における新しい日常を踏まえた、家族・親類、友人以外の第三者との関係性の中での新たな紐帯形成や宗教者との対話の可能性を示すものであると考えられる。

58 「おおさきのたからもの」（巻末資料 pp. 73-78）参照。

59 聞き取り調査記録（巻末資料 pp. 35-58）を総括したとき、この記録は里山伏と地域社会との関係性に係る記録である以上に、「地域の風土に対する一人一人の語りの積み重ね」であると捉えることができる。第3章の考察は、本記録を総括し、発見したものである。

なお、「風土」については、巻末資料 p. 34 の通り、共同研究で考察した考え方を踏まえ、聞き取りや対話に臨んだ。

60 「大崎というところは勉学の地であったようだ。医者が多く輩出されていたこともそうだし、宗教的な行事、文化的な行事の地であったようだ。この地域にはそういう素地があったんだと思う。だから大崎地区独特の教育や文化に対する風土もあったのかもしれない。教育が一生懸命だったので、優秀なのが結構出ているようだ。旧大和4村は教育熱心であるとも言える。これがこの町自体の風土に影響しているとも言えるかもしれない。こういうのが、妥協しない、意地を持った人間の土壌を生んでいるのかもしれない。伝統を崩さないというという精神があって、それを支える人間がいるということも知れない。それが風土なのかもしれない。」（三寶院・石動住職、巻末資料 p. 43）

「子どもたちも含めてなんとか大崎の伝統を守っていかなばなんないという空気感を感じます。こないだの学習発表会もそうだった。大崎ってところは、子どもらが誇りを持ちやすい地域だと思います。それに気づいてもらうことが大事なのかなって思います。自分たちの地域ってすごいんだなと思ってもらえればいいのか。」（大崎在住・50代女性）

61 「みえの文化をもっていた。隣が家建てたら、うちはそれよりいいものを立てようとした。みえの文化があったけど、今はみんな同じ意識になってきた。そういうところから文化も変わっている。」「（新年の子どもをお供につけた寺年始の流れ）…この地域ばかりは全部やっている。これだけは大崎が誇れるところである。大崎の5か寺でお互いに刺激しあっている。山伏やるなら神主だって、お寺さんだってやるようになる。これが大崎だけに残る特徴である。大崎地区独特の風習である。伝統を守るという意味でもとても大事なことだろうと思う。（三寶院・石動住職、巻末資料 pp. 40-41）

62 新潟県中越地方の話し方、「やらなければならない」の意である。

63 「祭りにしても年中行事にしても、やっぱやめらんないという責任感、使命感があるんだろうな。」「隣近所がほんとに大事なコミュニティで、昔は、除雪の時には隣のうちまで雪掘りしたもんだ。隣が病気になった時にソリで運んだりした。」「ただ、大崎って若者から嫌われている。祭りが多し、集金も多いし、付き合いも深い。」「大火渡祭の日は地区の人は、どこの家も木札を書いて火渡りで祈祷する。それだけ、地区をあげてやっているし、この祭りだけではなく、いろんな祭りで地区の人が参加している。すごくつながりが強いところはこういうところにもでてる。」（大崎地区在住・60代男性、巻末資料 p. 54）

「地域としてはいろいろな行事に子どもらを参加させている。これは大崎の特徴なのか

など思う。地域の方たちが一緒に動く機会がほんとに多いと思う。大崎区の中で強く繋がっているのは肌で感じる。」(大崎地区在住・60代女性、巻末資料 p. 57)

64 「新たな檀家さん、マキ単位での訪問など、そういったものが、だいたい3月いっぱいまで続く。お祓い、御祈祷、対話が行われる。従って健康でなければならない。今日まで、日にちを決めていけなかったことは1度だけ。やはり健康が一番大事だと思う。毎日、体力の向上をするために、歩いたり自転車に乗ったりしている。山伏はやっぱり体力と気力、そして、冬の一番厳しい時に信徒の期待に応えられるようにしている。これが修験者の一番の根源だと思う。だからこそそのありがたみなんだと思う。修験者独特の、この地域の期待に応えていくということなんだと思う。だから特別になり手がなくなる。」(三寶院・石動住職、巻末資料 p. 42)

65 宮家準『修験道 日本の諸宗教との習合』春秋社、2021、p. i～ii

「民族宗教」とは、宮家の定義した用語であり、「諸宗教を習合させた形で常民の間に浸透している宗教」であり、里山伏が拠り所としている修験道を「日本における典型的な民俗宗教である」としている。

大崎地区のように八海山信仰や里山伏(里修験)に由来する一定の宗教的風土や文化が根強く残る地域の中にある庶民信仰の本質を示しているものと考え、本用語の引用により、地域住民に寄り添う対話性をもった宗教的指導者たる里山伏の位置づけを示した。

参考文献

-
- 1.有明雅弘「修験の葬祭についての覚 ーいわゆる「一派引導」について」『秋田県立博物館研究報告』第26号、2001、pp. 90-79
 - 3.井賀孝『山をはしる 1200日間山伏の旅』亜紀書房、2012
 - 4.磯部定治『越後・魚沼人の暮らしの足跡』野島出版、1986
 - 5.今堀洋子「修験道に焦点をあてたまちづくりの可能性：羽黒修験道を事例に」『追手門学院大学地域創造学部紀要』5巻、2019、pp. 1-19
 - 7.伊藤茜「地域社会に生きる里修験：親子二代の代替わりを事例に」『日本民俗学』日本民俗学会編(280)、2014・11、pp. 36-69
 - 8.越後ワイン株式会社『雪国でワインに挑んだ男たち』越後ワイン株式会社、2003
 - 9.大久保悟道『水上山大崎院寺院史』大崎院所蔵(非公開)、2020
 - 10.大崎の村誌編集委員会『大崎の村誌』大和町大字大崎区、1978
 - 11.小田匡保「新潟県における寺社の分布と地域区分」『駒澤地理』駒澤大学文学部地理学教室・駒澤大学総合教育研究部自然科学部門編(47)、2011・3、pp. 13-33
 - 12.加藤幸治『文化遺産シェア時代 価値を深ぼる“ずらし”の視角』社会評論社、2018
 - 13.加藤幸治『民俗学 ヴァナキュラー編 人と出会い、問いを立てる』武蔵野美術大学出版局、2021
 - 14.金本拓士「修験道の近代化の問題」『現代密教13号』智山伝法院、2000、pp. 83-105
 - 15.鎌田東二監修『図説 地図とあらすじでわかる！山の神々と修験道』青春新書、2015
 - 16.木岡伸夫『<出会い>の風土学 対話へのいざない』幻冬舎、2018
 - 17.菊池暁・佐藤守弘編『学校で地域を紡ぐ ー『北白川こども風土記』からー』小さ子

社、2020

- 18.岸正彦・石岡丈昇・丸山里美『質的社会調査の方法 -他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016
- 19.久保康顕「里修験」とは何か『現代思想』49 (5) (臨増)、2021・5、pp. 274-287
- 20.久野俊彦「奥会津から見る日本の聖教典籍文化:地域における里山伏(法印)の文化活動」『説話文学研究』(47) 説話文学会編、2012・7、pp. 26-36
- 21.坂本大三郎『山伏ノート -自然と人をつなぐ知恵を武器に一』技術評論社、2013
- 22.坂本大三郎『山の神々 伝承と神話の道をたどる』エイアンドエフ、2019
- 23.佐藤文哉『日本の即身仏』光風社書店、1969
- 24.鈴木正崇『山岳信仰 日本文化の根底を探る』中公新書、2015
- 25.鈴木正崇「日本人にとって山とは何か -自然と人間、神と仏-」『ヒマラヤ学誌』京都大学ヒマラヤ研究会 No.20、2019、pp. 54-62
- 26.鈴木昭英『富士・御嶽と中部霊山 (山岳宗教史研究叢書9)』名著出版、1978
- 27.関口健「ある法印様と現代 -里修験のこれから」『武蔵大学人文学会雑誌』武蔵大学人文学会編 41 (2) (通号 161)、2010、pp. 229-266
- 28.関口健『法印様の民俗誌 -東北地方の旧修験系宗教者-』岩田書院、2017
- 29.専修大学経営学部森本ゼミナール編『大学生、限界集落へ行く 「情報システム」による南魚沼市辻又活性化プロジェクト』専修大学出版局、2016
- 30.高岡功「越後八海山について」『あしなか』(132) 山村民俗の会、1972・4、pp. 4-8
- 31.高橋千劔破『名山の文化史』川出書房新社、2007
- 32.恒遠俊介『修験道文化考 今こそ学びたい共存の知恵』花乱社、2012
- 33.東京大学文化資源学研究室編『文化資源学 文化の見つけ方と育て方』新曜社、2021
- 34.時枝務・長谷川賢二・林淳編『修験道史入門』岩田書院、2015
- 35.中村良夫『風土自治 -内発的まちづくりとは何か』藤原書店、2021
- 36.新潟日報事業者出版部編『写真集 ふるさとの百年<南魚沼>』新潟日報事業者、1981
- 37.新潟日報事業者出版部編『図解 にいがた歴史散歩 南魚沼』新潟日報事業者、1983
- 38.西村幸夫・野澤康編『まちを読み解く -景観・歴史・地域づくり』朝倉書店、2017
- 39.西村俊哉「近世における百姓修験について -武州三峰山百姓修験の還俗をめぐって」『武蔵文化論叢』(5)、2005・3、pp. 1-11
- 40.ネリー・ナウマン『山の神』言叢社同人、1994
- 41.長谷部八朗・講研究会編集委員会編『人のつながりの歴史・民俗・宗教-「講」の文化論-』八千代出版、2022
- 42.原小路町内史研究会『郷土史 はらくじ』原小路町内史研究会、2020
- 43.平井太郎・松尾浩一郎・山口恵子『地域・都市の社会学 -実感から問いを深める理論と方法』有斐閣、2022
- 44.松井利夫・上村博『芸術環境を育てるために』藝術学舎、2020
- 45.松本茂章『文化で地域をデザインする 社会の課題と文化をつなぐ現場から』学芸出版社、2020
- 46.松本浩一「越後八海山信仰調査の中間報告 -実態と今後の課題-」『宗教学論集』駒沢宗教学研究会、1975、pp. 29-52
- 47.松本浩一「越後八海山信仰の実態 (承前) -大倉口より不動岳にいたる-」『宗教学論集』駒沢宗教学研究会、1979、pp. 43-58

-
- 48.宮城泰年『山伏入門 人はなぜ修験に向かうのか?』淡交社、2006
 - 49.宮城泰年・田中利典・内山節『修験道という生き方』新潮選書、2019
 - 50.宮家準『修験者と地域社会 一新潟県南魚沼の修験道一』名著出版、1981
 - 51.宮家隼『修験道辞典』東京堂出版、1986
 - 52.宮家隼『修験道小辞典』法藏院、2015
 - 53.宮家隼『霊山と日本人』講談社学術文庫、2016
 - 54.宮家隼『修験道 一日本の諸宗教との習合一』春秋社、2021
 - 55.宮本袈裟雄『里修験の研究』吉川弘文館、1984
 - 56.宮本袈裟雄『里修験の研究 続』岩田書院、2010
 - 57.宮柴治『雪国の宗教風土 越後の信仰・歴史・人間』名著刊行会、1986
 - 58.南魚沼市『南魚沼 市民ガイドブック』南魚沼市、2020
 - 59.南魚沼市教育委員会『郷土史編さん誌 みなみうおぬま 第十二号』南魚沼市教育委員会、2015
 - 60.南魚沼市教育委員会『大和町の近世』南魚沼市教育委員会、2019
 - 61.南魚沼市教育委員会『大和町の近現代』南魚沼市教育委員会、2020
 - 62.六本木健志監修・編著『今に受けつがれる雪国の生活文化（新潟県南魚沼市） 小学校4年 社会（副読本）「県内の伝統や文化、先人のはたらき」』文教大学教育学部社会専修、2021
 - 63.六本木健志監修・編著『小学校5年生 社会（国土の地形） 低い土地の暮らし・高い土地の暮らし ～埼玉県加須市・秩父地域～』、文教大学教育学部社会専修、2021
 - 64.山形隆司「歴史・民俗 近世の尾張国知多郡における里修験の活動と村：加木屋村を中心に」『知多半島の歴史と現在』日本福祉大学知多半島総合研究所編（20）、2016・10、pp. 159-173
 - 65.山下祐介『地域学をはじめよう』岩波ジュニア新書、2020
 - 66.大和町史編集委員会『大和町史 中巻』大和町、1991
 - 67.山中清次「近世・町修験の基礎的研究」『佛教大学大学院紀要』第36号、佛教大学大学院、2008・3、pp. 83-98
 - 68.由谷裕哉「地域社会における里山伏の宗教活動」『小松短期大学論集』小松短期大学地域創造学科編（16）、2004、pp. 19-41
 - 69.和歌森太郎『山伏 一入峰・修行・呪法』中公新書、1964
 - 70.和歌森太郎『修験道史研究』平凡社、1972
 - 71.渡辺行一『越後南魚沼民俗誌 常民文化叢書6』慶友社、1971

【巻末資料】
南魚沼市八海山麓地域の風土の研究 ―地域に生きる里山伏―



イメージ画像:南魚沼市清水集落での山伏の祈り(出典:夢あふれる四季の里 清水HP)

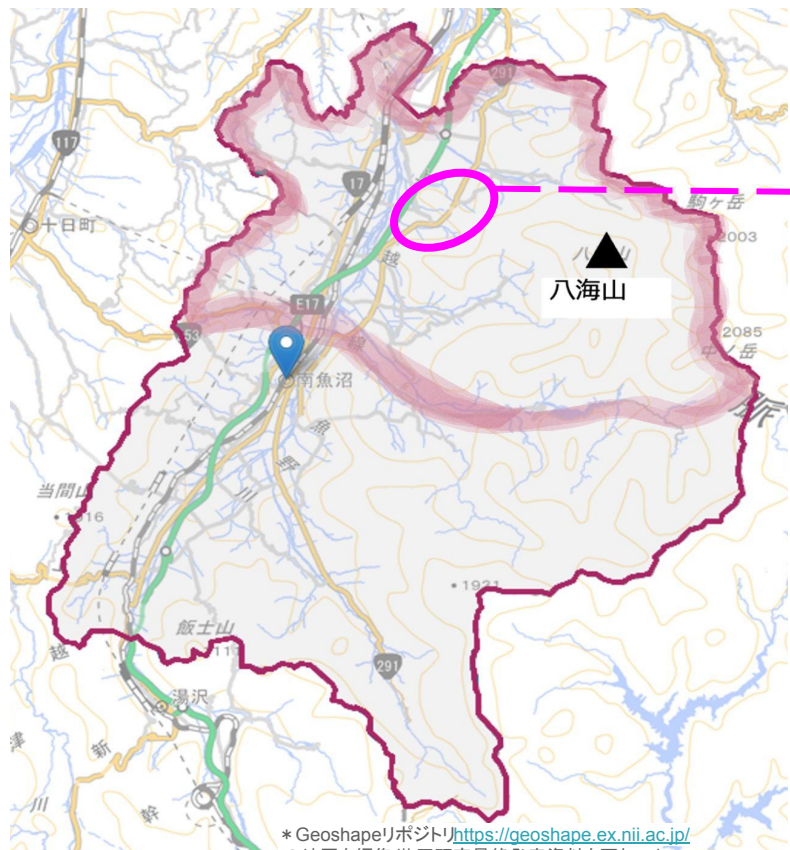
芸術環境専攻 学際デザイン研究領域

52186053

佐藤 隆彦

図1 南魚沼市、八海山麓地域、大崎地区（大崎小学校区）

南魚沼市—八海山麓地域—大崎地区の位置関係



- 南魚沼市
- 大崎地区
- 研究対象とする八海山麓地域

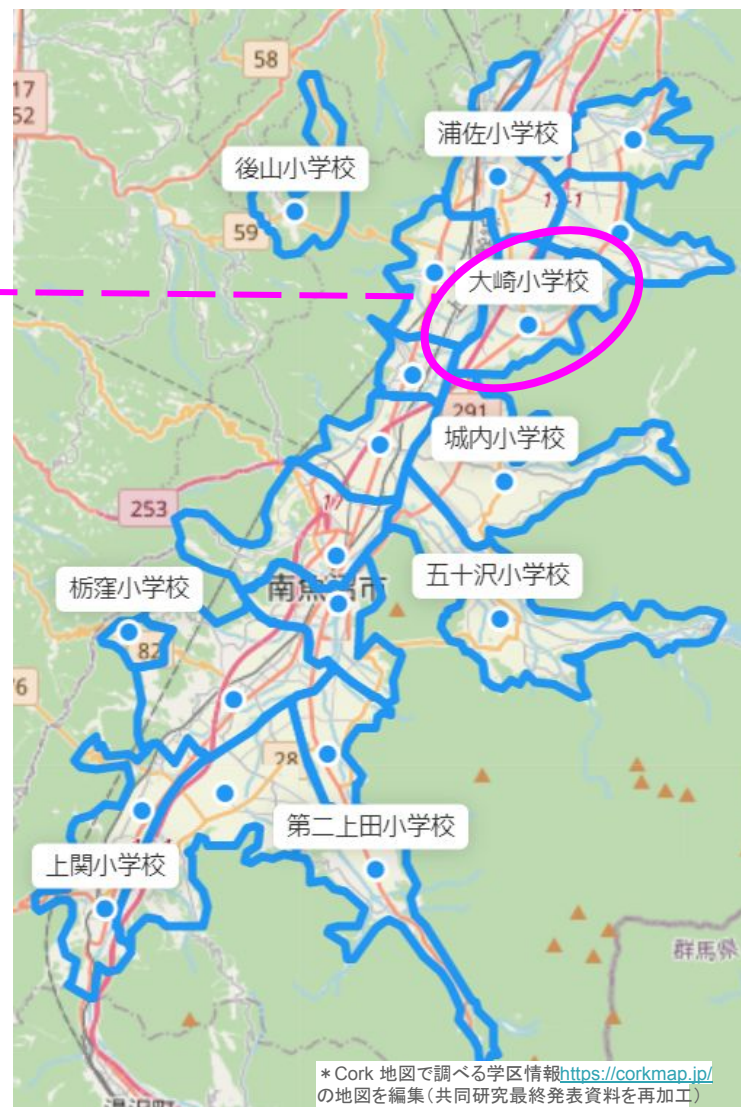


図2 里山伏と地域社会との関係性

- ・本研究に係る問題意識をもとに、里山伏の活動領域の二面性や地域社会との関係性を図解化したもの。
- ・主に「大崎地区」の里山伏(修験寺院の法印)の語りをもとに作成したもの。

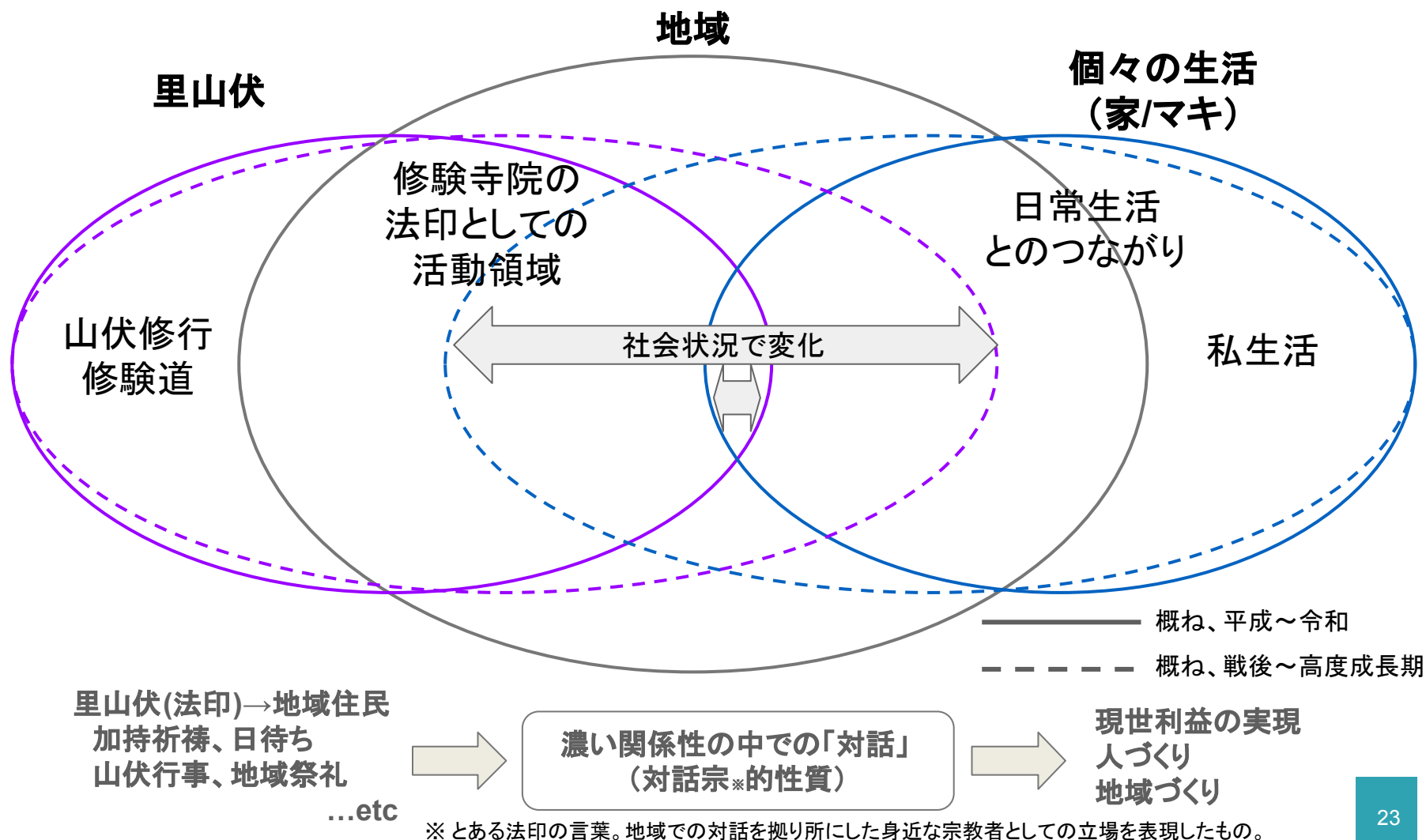
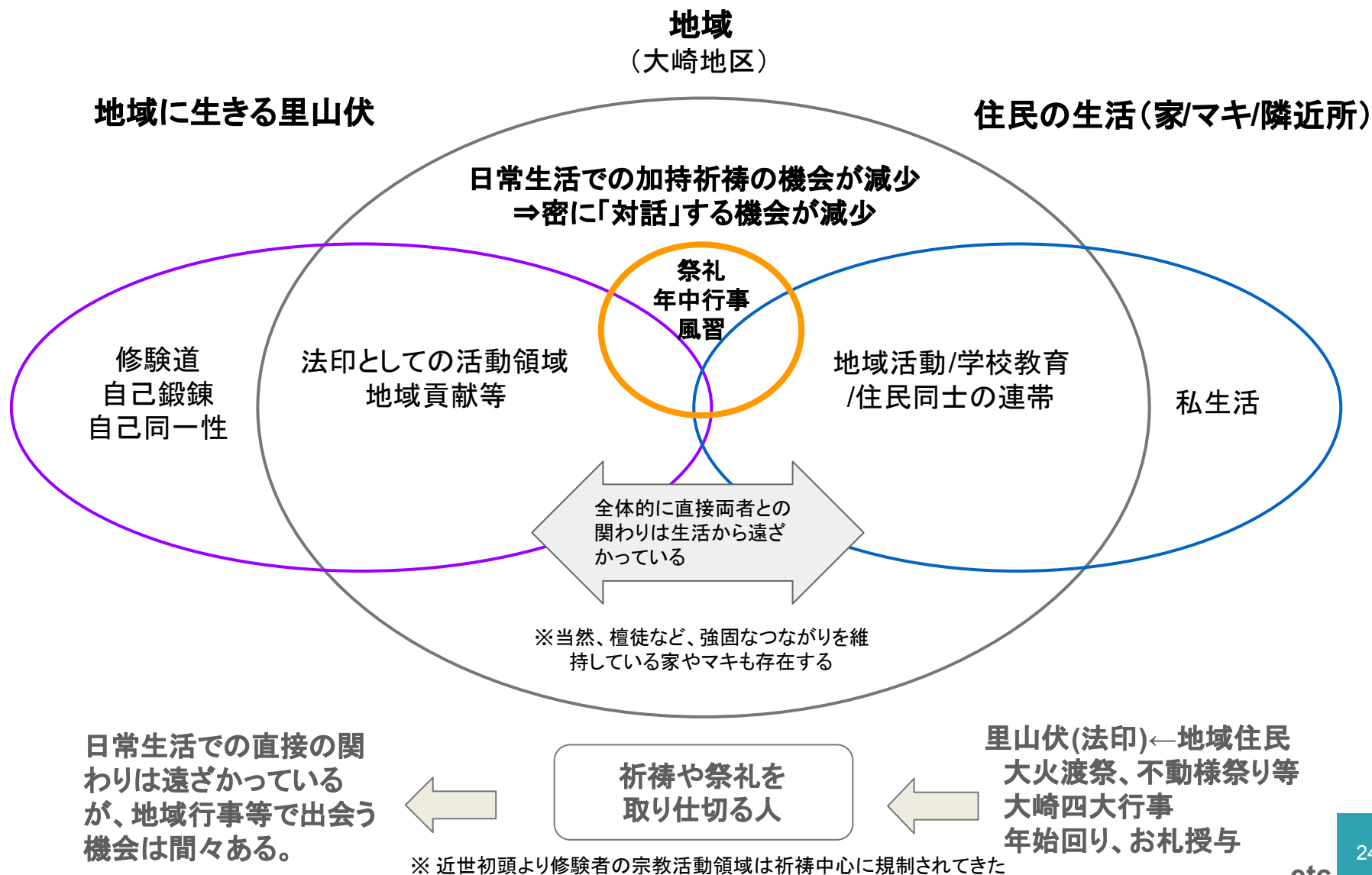


図3 現代における里山伏と地域社会との関係性

・里山伏や地域住民からの聞き取り、地域住民からのアンケート調査をもとに図解化したもの。



山岳信仰と八海山信仰 — 霊山としての八海山の意義 —

● 山岳信仰 — 祈りと恐れの対象 —

山岳に宗教的意味を与えて崇拝し、また山岳を対象とした種々の宗教的儀礼をおこなうもの

特徴① 神仏習合/本地垂迹

日本古来の自然信仰が仏教と融合し、仏が神々に姿を変え、庶民を救済する。修験道は日本独自の山岳信仰である。

特徴② 山の神/水の神/農耕の神

春は山の神が里に降りて田の神となる。
秋の終わりには田から上がって、山に向い、山の神として還る。

特徴③ 信仰の基盤としての山中他界観

山は死者の霊魂が集まる場であり、死者を供養する場でもある。山は死後の世界であるとともに、生まれる前の空間とされる。

● 八海山信仰 — 信仰の諸相 —

山岳信仰の特徴を備えるとともに、交通地位の影響による修験宗派の共存による展開がある。

特徴① 多様な霊山信仰や修験が併存

交通地位が良好であり、木曾御嶽信仰、熊野権現信仰、白山信仰、出羽三山信仰などが併存し、霊場として展開していった。

特徴② 御嶽教との関係性が濃い

御嶽行者の普寛が開山するとともに、御嶽山との兄弟山としても崇められている。

特徴③ 八海山修験の祈祷・呪術儀礼

八海山の修験者は、霊神碑を背にし、御座などの神がかり儀礼を多発的に行う特徴を持つ。木曾御嶽教の憑祈祷の影響がある。

修験道の思想・儀礼と歴史

修験道は日本古来の原始的な山岳信仰が古神道や道教、仏教、密教など多くの宗教が混合して成立した宗教

- ・山中の神羅万象そのものを經とし、峰入修行による即身成仏を眼前に据えて展開
- ・山岳修行による験力の獲得と呪術宗教的な活動を行う実践的な儀礼中心の宗教

原始	日本古来からの自然信仰をもとに、山岳は神霊のいる他界として崇められてきた(山中他界観)。農耕文化の流入が影響し、神秘的な力を持ち、暦や天候を知る原始宗教者を「日知り」と呼んだ。後に「聖」と呼ばれ、国の王となった。
古代	【奈良時代】 仏教や道教の影響を受けた宗教者たちが山岳修行し、呪術宗教的な活動に従事していった。修験道の開祖として仮託された役小角(えんのおづぬ)も葛城山で修行していた山岳修行者の一人である。 【平安時代】 最澄や空海による山岳修行の提唱もあり、密教者たちも好んで霊山での山岳修行を行うようになり、加持祈祷で著しい効験を持った密教僧を修験者と呼んでいた。彼らは山に臥して修行しており、「山臥(さんが)」と呼ばれた。
中世	修験者は中世期を通じて全国各地の山岳で修行し、村々を遊行していた。 【鎌倉時代】 役小角の伝記が編まれて修験道が成立していく。熊野山伏らの聖護院を総本山とする本山派、廻国修験者らの興福寺の後建ての醍醐寺の三宝院を総本山とする当山派といった修験教団が形成された。 【室町時代】 教義や峰入作法も定まり修験道が確立した。御嶽教の普寛、泰賢らの八海山開山(寛政 6)もこの頃である。
近世	【江戸時代】 幕府政策により、各地の山伏は本山派か当山派のいずれかに所属 するようになった(修験道法度(慶長 18))。また、遊行は禁止され、里や村に定着し、専ら加持祈祷や呪法等の呪術宗教的活動に従事するようになった(里山伏)。里山伏は江戸幕府の政策により増加していったとも言える。さらに、江戸中期には修験者の影響もあり、庶民の講による霊山登拝が盛んに行われるようになった。
近代	【明治時代】 神仏分離令(明治 1)に続き、修験宗廃止令(明治 5)により、修験道は禁止 され、神職になるもの、僧侶となるもの、帰農し、還俗するものなどに分かれた。本山派修験者は天台宗に、当山派修験宗は真言宗に所属させられた。また、 廃仏毀釈により、修験道の信仰に関するものは破壊され、名目上、社会から修験者はその姿を消し 、修験系の講団体の中には、明治以降仏教色を薄めて教派神道となったものもある。だが、明治中期には各霊山の講も復活していく。
現代	【昭和時代】 第二次世界大戦後、真言宗醍醐派(総本山三宝院)、本山修験宗(総本山聖護院)、金峯山修験本宗(総本山金峯山寺)、修験道(総本山五流尊滝院)などの修験教団が相次いで独立し、日本国憲法の影響もあり、 修験道は再び活況を呈するに至る。南魚沼では現在でも数多くの修験者が地域社会の人々の宗教的要請に応えている。

大崎地区（旧大崎村一帯）の地域性の特徴

霊峰 八海山の麓の里宮を中心に栄えてきた地域性

- 本地域は三方を山に囲まれ、交通の便も悪く、狭いエリアに集落が密集した地理的特徴
- 八海山信仰の拠点となる里宮 や、関連する伝統・風習が維持され、残っている こと
- 八海山信仰や山伏らの祭祀的行事に小学校時代から全員が関与できる土壌があること
- 大崎地区に残る年中行事・風習を里山伏（法印）らが担っている こと

多数の祭礼等により、人が集まり・結束する土壌のある地域性

- 宗教的祭礼など、祭りが盛んであり、これをとおして山伏や法印等との接点がある こと
（「大崎は宗教的な祭りで明け暮れしていて、よくやっているな」）
- 祭礼・宗教的行事により地域外からの人の集結と地域内の団結力・生活力等の向上
- 農業のみならず、多種多様な職人のまち（「大崎に行けば何でも用がたせる」）

参考：大崎の村誌編集委員会『大崎の村誌』大和町大字大崎区、1978
原小路町内史研究会『郷土史 はらくじ』原小路町内史研究会、2020

(だいきいん)

地域の里山伏が途絶えることの影響 —大崎集落と大崎院—

2021年9月に住職が遷化し、住職が不在となった。(回覧板「大崎院の年末年始行事の取り止めについて」大崎院役員代表2021.12)



里山伏(法印)との日常的な接点が消えた。檀家も含め、生活の中での里山伏との対話の場が完全に消失した。

当院では、現在において住職が不在となっておりますので、例年行っておりました年末年始の諸行事につきましては、下記のとおり執行行わないことといたします。
諸般の事情を御賢察の上、御理解を賜りますようお願い申し上げます。

記

(取り止める行事)

- 一、大黒様のお札配り
- 二、年始の御来院
- 三、年始の御挨拶、お札配り

大崎院が部落の中で担ってきた独自の行事が取り止められた。

3	2	1	12	月日
4	21~23	11	31	内容
ク開催 十二日まで	北京冬季オリンピックにも連なる	龍谷寺だんご餅き中止(滞奥志)	大晦日、大福社、龍谷寺に二年越し	歳時記
		4 龍谷寺新嘗祭(規模縮小)	檀家氏子龍谷寺	かわら版 はらくじ 原小路町内史研究会発行 令和四年三月十五日 第六号
		3 節分祭(規模縮小)	所八年前の挨拶、本年	
		28 八海山寒修行(少人数で二月三日まで)	元日 大前頓止	
		21 景初のコロナウイルスまん延防止等重点措置適用 二月六日まで延長	9 町内どんと焼き	

大崎地区に残る独自の風習の担い手の一人が消えた。

6	5	4	3	月日
5	29	17	8	内容
龍谷寺観音大祭・昨年と同規模小して開催	龍谷寺選挙投票日	田植え始まる	茶供進	かわら版 はらくじ 原小路町内史研究会発行 令和四年六月十五日 第七号
		29 龍谷寺権仏会(花祭甘)	大崎院本不動様春祭り	
		20 八海山季大祭・昨年同様縮小して開催	16 消える	
		14 里の桜も咲き始める	11 里宮霊園の桜咲き始める	
		3 議決	3 原小路町内総会・会議のみ懇親会中止	

流芳録と流芳録の「流芳」は世に尽くした人の名功績・遺徳を後世に伝へることを表す言葉である。「流芳録」の冒頭の巨匠の記録に続いて孝子と名徳の徳行が記載されている。峠では上小路の飯酒壺次左門の長男勝蔵、原小路大久右衛門の娘で水尾に嫁した名前の名がある。五名ともに魚沼郡志(大正九年発行)に「大崎の村誌」にも記載されている。学者や俳人・画家の「前」もあり多岐にわたっている。以後の記載は日清日露戦争で戦死した人々や、徴兵され戦死された人々や、流芳殿は役場の二階に置かれたに「流芳」が納められた。流芳も掲げられていた。大

大崎四大家行事の一つが途絶えた。

地域の回覧版(左下)「大崎院の年末年始行事の取り止めについて」大崎院役員2021.12
地域の回覧広報(右上)「かわら版はらくじ第六号」原小路町内史研究会.2022.3
(右下)「かわら版はらくじ第七号」原小路町内史研究会.2022.6

新しい日常での新たな関係性構築の可能性

2022年12月11日、萬学院・田村昌法住職

- ・地域の外から里山伏との対話を求め、人生課題の解決や救いを求める動きがみられる。
- ・コロナ禍により、社会生活や人間関係のあり方や距離感が大きく変わってきたのだろう。
- ・高度情報社会（インターネット、SNSによる拡散）など、時代に合わせないとならん。
- ・近所の方がお日待ちの様子をインターネットにあげてくれて、大きな反響あった。
- ・都内や南魚沼に全く所縁のない人からの祈祷や人生相談が増えている。
- ・新たなスタイルとしての、郵送でのお札や幣束の依頼（遠方でお日待ちを受けることができない）が著明に増えた。これまでは親類等の20件くらいだったが、今年は急に120件以上の依頼がある。特に首都圏の人からの依頼が多い。なお、筆者も今般のご縁により依頼した。
- ・特にコロナを境にこうした動きが著明に増えた。
- ・うちでは郵送だったとしても、お札や幣束は必ず護摩祈祷している。
- ・白い箱につめて送るのだけでも、神棚のない家にとってはこれがいいらしい。家具の上にそのまま立てておくことができる。こういうのがあると、自然と子どもも手を合わせるようになっているとも聞いている。情操教育という意味でもいいのかもしれない。
- ・定着という点では今後の動向を見る必要はある。一時のことにならなければいい。

➡考察

- ・時代や暮らしの変化を踏まえた、新たな文化資産の利活用のあり方として興味深い。
- ・科学技術の進歩や都市化、生活スタイルの変化などにより、忘れかけていたもの（生活の中に神仏があり、庶民的な信仰があること、何かに守られて生きていること、共同体の中で支えられながら生きていること等）を、対話を通して再度思い起こしてくれる存在としての里山伏の社会的価値が示唆される。

共同研究における風土記の方向性

- **境界**
あえて「八海の国」という境界を作ることで地域内に目を向けるきっかけを作る。
- **密度**
地域の人々が自ら文化資産を発見し、価値を再評価することで地域内の文化資産の密度を濃くする。
- **濃度**
共同体や維持継承されてきた文化資産に対する思いの弱い(薄い)世代と共に次世代に伝わるものを作る。

ターゲット

地域の小学校高学年～高校生(合併や統廃合により新しい境界で育った世代)

目的

地域を離れる前に足元の風土に触れることでふるさと観を育み、外に出た時に懐かしさや地域の良さを感じられるようにする。

形式

気軽に触れることができ、随時更新できること。
一方的に風土を伝えるのではなく、共創的なものであること。

共同研究を踏まえ、個人としての社会提案の展望

共同研究における風土記の方向性

- **境界**
あえて「八海の国」という境界を作ることで地域内に目を向けるきっかけを作る。
- **密度**
地域の人が自ら文化資産を発見し、価値を再評価することで地域内の文化資産の密度を濃くする。
- **濃度**
共同体や維持継承されてきた文化資産に対する思いの弱い(薄い)世代と共に次世代に伝わるものを作る。

ターゲット 地域の小学校高学年～高校生(合併や統廃合により新しい境界で育った世代)

目的 地域を離れる前に足元の風土に触れることでふるさと観を育み、外に出た時に懐かしさや地域の良さを感ぜられるようにする。

形式 気軽に触れることができ、随時更新できること。
一方的に風土を伝えるのではなく、共創的なものであること。

①地域の人自身が知り、地域の人々の文脈で次世代(子ども、若者)に語り継ぐこと

②郷土に誇りをもち、郷土の自慢として話せること、伝えられること

※ 地域住民に対するアンケート調査の回答からも支持される。

「この地域の独自の風土や文化であるという認識を市民自身が持って、守っていかなければ衰退して消えてしまうという感じます。」

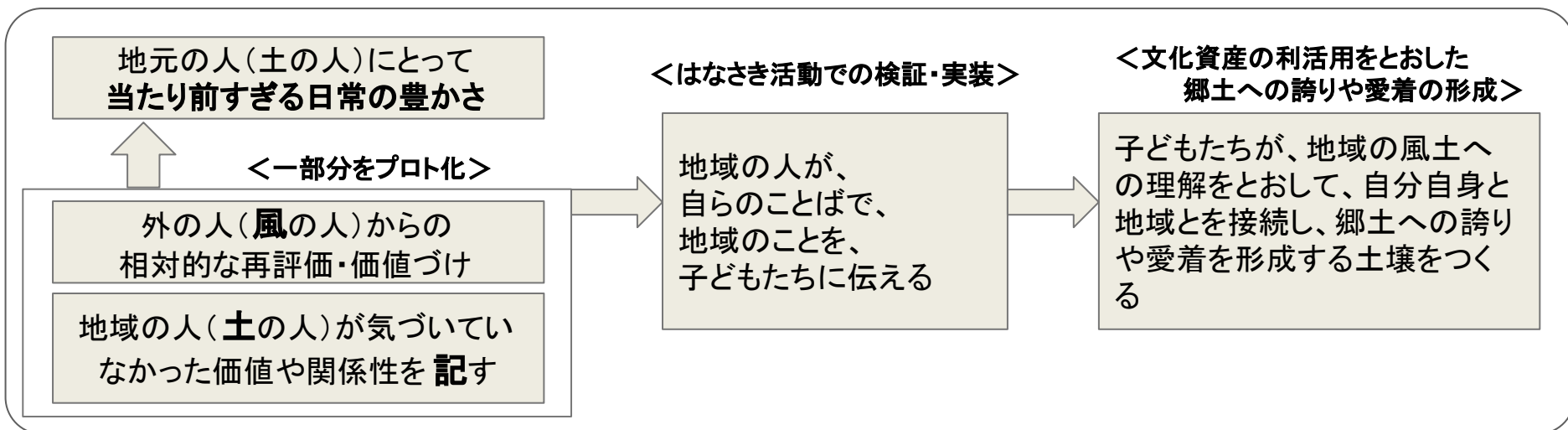
「当たり前のように過ごしていると、八海山麓地域の独自の風土や文化についての情報を得る機会が少ないので、地元の人でも知らないことが多い。世代が下がるにつれ、そういったことを知る機会が少ないと思うので、若い世代に知ってもらうことで風土や文化が守られるように思う。」

大崎地区に特化した文化資産の利活用に係る提案

地域内の唯一の学校である大崎小学校では、「地域ぐるみで地域の希望である子供たちを育てよう~大きく咲かそう 希望の花を~」とし、「できる時に、できる人が、できることを」を合言葉に、地域の人材を教育活動の支援に活かしている。H20年度からはじまり、現在でも大崎小学校支援本部(はなさき本部)と学校が精力的に連携し、取り組んでいる。

➤ プロトタイプのお考え

大崎地区の現代版風土記の部品となる一部を試作し、以降の検証につなげたい。



※ 大崎小学校校長へのインタビュー

「様々な小学校で勤務してきましたが、大崎小学校って、地域のほうから学校にどんどん入ってきている地域で、そこで地域のことを学ぶ土壌があります。はなさき本部っていうのがあって、地域の方から学校に入ってきているのが特徴です。地域の繋がりがほんと他の地域に比べて濃いのが特徴かなと思います。他でこれをやろうとしたらほんと大変だと思います。地域の方が直接担任と話して授業を組み立てているところが特徴的なところですよ。」

※ はなさき本部コーディネーターへのインタビュー

「子どもたちも含めてなんとか大崎の伝統を守っていこうという空気感を感じる。こないだの学習発表会もそうだった。地域の子供達は自分たちの地域のことを知ったら喜ぶと思う。大崎ってところは、子どもが誇りを持ちやすい地域だと思います。それに気づいてもらうことが大事なのかなって思います。自分たちの地域ってすごいんだなと思ってもらえればいいのかな。こうしてやっぱり外部から改めて価値づけしてくれることが大事なんだと感じます。今のあなたのお話で大崎のすばらしさをこういうふうに変更して気づけたことはとてもありがたいことです。」

大崎の文化資産の利活用 — おおさきの たからもの (仮称) —

「八海山と伝統文化」の視点で、昔から引き継がれ、今に残る、地域独自の伝統文化

註: 写真掲載はそれぞれ使用許諾済み。詳細は巻末資料pp. 73-78に記載。

 <p>霊峰 八海山</p> <p>この地の暮らしや風土と強く結びついていて、霊峰と言われるとおり、古くから信仰の対象として仰がれてきた山です。</p> <p>八海山信仰は、神様と仏様が混ざり合うかたちをとりながら発展してきました。</p>	<p>修験道と山伏</p> <p>修験道は山岳崇拜により、山岳修行によって力を得て、自他の救済を目指す日本独自の宗教です。</p> <p>修験道を実践する者を山伏と呼び、里に定着する「里山伏」は、南魚沼と高知県の一部にしか残っていないと言われています。</p> 	<p>暮らしの中根づく祭礼</p>  <p>6月第一日曜日 龍谷寺開運観音大祭 (八海山 龍谷寺)</p>	 <p>地域に生きる里山伏</p> <p>地域に生きる里山伏の一つの姿として、修験寺院の法印という生き方があります。彼らの地域社会での役割や価値の根底には、地域・家(家族・マキ)・個人に対して、日常生活の中でのご祈拝やお慶いなどをとおした「対話」による生活問題の解決や個人・共同体の救済があります。</p> <p>里山伏は、対話による人づくり・地域づくりを担っています。</p>	<p>大崎の白根! 大崎が発祥の地 八海山の湧水と大崎菜</p>  	<p>大崎だけに残る風習 新年の「ももー」、「どうーれい」</p> <p>ももー! どうーれい!</p> 
<p>八海山信仰や修験道に由来する 伝統や習俗が根強く残るまち</p>  <p>山岳信仰や身近な神々 大前神社御九日祭</p> <p>八海山は山の神でもあり、秋の刈り入れが終わると山の神として山に帰ります。祭束となつてマダイショウを立て、湯立て神事を行います。田植えの時には山んぼに立てて、豊年豊作を祈ります。</p>	<p>水に始まり、火に終わる 八海山の修業</p> <p>大寒の流行りに始まり 秋の火渡りに終わる</p> <p>大寒の1月28日~2月3日の節分祭まで、八海山大崎口里宮の不動滝で、雪中の御滝に打たれての水垢離(みずごり)修行が始まります。</p> <p>10月20日の火渡大祭で一年の修業の終結を迎えます。</p> 	<p>8月14日 「翁式三番」奉納 8月15日 大前神社 例大祭 (大崎神社) 新潟県指定無形文化財</p>  <p>10月19日 大祭前夜御神灯祭 10月20日 八海山大崎口火渡大祭 (八海山尊神社)</p> 	<p>石動山 三寶院 石動住職</p>  	<p>およそ300年前の江戸時代に伝わった小松菜を改良した菜の一種で、大崎地区で栽培が始まったことから「大崎菜」と呼ばれるようになりました。</p> <p>八海山の麓から湧き出ている「湧きの清水」を利用して、昔から栽培されています。</p> <p>雪深い大崎に欠かせない伝統の野菜です。</p> 	<p>大崎だけに残る風習の一つで、正月に里山伏らが集落の住民に対して年始のあいさつまわりを行います。その時に子どもがお供について、一緒にまわります。</p> <p>この際、お供の子どもからの「ももー」、対して家主らの「どうーれい」のかけあいでは南魚沼でも大崎にしか残っていません。</p> 

「地域の人自身が知り、地域の人々の文脈で次世代(子ども、若者)に語り継ぐこと」「郷土に誇りを持ち、郷土の自慢として話せること、伝えられること」

<試作版Ver.230109>

おおさきの たからもの
八海山と伝統文化 編



八海山の麓 水と火をまつるまち大崎
2023.1

地域を調べてみよう

住んでいる地域の何月(どの季節)が一番好きですか? それはどうしてですか?

自分の住んでいる地域には、どのような古いものが残されているでしょうか。どんな地域かな?どんな自然や風景がある?どんな伝統がある?昔はどんなだった?

わたしが住んでいるところは…

八海山をかいてみましょう!

自分の住んでいる地域の特ちょうはなんだろう…?昔から残っているものには、どんなものがあるだろう…? (例:行事・まつり、食べ物、自然、建物、文化…)

①

②

③

気づいたこと

みんなで調べてみよう

住んでいる地域の特ちょうがあること、しまんできることなど、グループで協力して詳しく調べよう!

まちの人に聞いてみよう!

さん

さん

調査タイトル

もっと詳しく知りたいこと

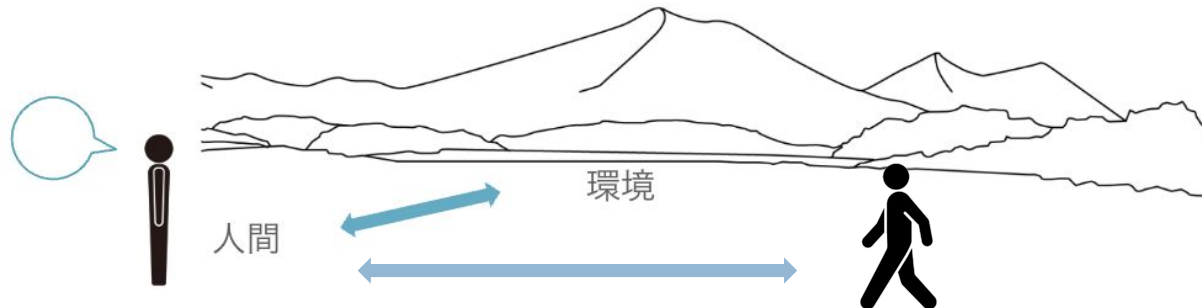
調べ方

他の地域と比べてみよう!
(比べる地域) (自分の地域とのちがい)

(比べる地域) (自分の地域とのちがい)

地域の特ちょうってなんだろう?

「風土」について



風土の図解イメージ

気候や自然だけでは風土と言えず、人が自然に適応したり、立ち向かったりと継続的に働きかけを行った結果、その自然を自分たちの生活に取り込むことができるようになる。



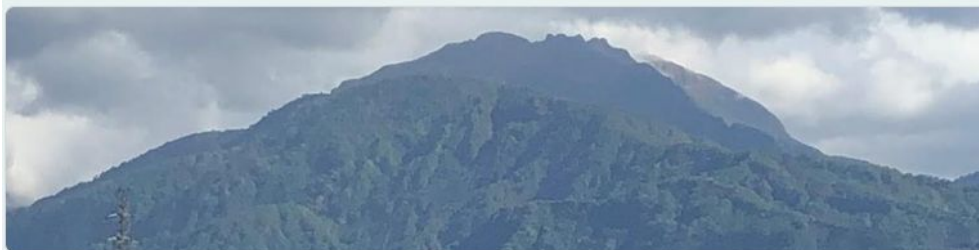
地域の人と自然の関係が生み出したその地域特有の文化や生活様式・
気質などが、地域外の人と交わることによって形作られるもの。

聞き取り調査記録

- ・ 本山修験宗 三寶院 石動晃順氏 (2022.9.11、10.10)
- ・ 本山修験宗 快慶院 今成真治氏 (2022.9.11)
- ・ 本山修験宗 快蔵院 雲尾保善氏 (2022.9.9)
- ・ 本山修験宗 大崎院 家族 (2022.10.10)
- ・ 真言宗醍醐派 満願寺 栗田氏 (2022.10.10)
- ・ 本山修験宗 萬学院 田村昌法氏 (2022.12.11)
- ・ 大崎地域づくり協議会 事務局長 (2022.10.20)
- ・ 大崎地区住民 (2022.10.20、11.2)
- ・ 大崎小学校長 (2022.11.2)
- ・ 大崎小学校地域コーディネーター (2022.11.2)
- ・ 大崎地区出身者 (2022.11.2)

註：記録されている表現は可能な限り、現地の方の言い回しや方言で文字に起こしたものである。助詞の不足や抜け、標準的な国語表現としての違和感などは現地での語りならでのものであること、ご賢察いただきたい。

「地域に生きる里山伏」についてのアンケート調査



3 セクション中 1 個目のセクション

八海山麓地域の風土・文化について

[八海山麓地域（大和町～六日町地域の一部を想定）](#)に在住・在勤など、**地域に所縁のある方々**へのアンケート調査のお願いとなります。主に「**里山伏**」についての認識や地域の宗教行事への参加等についてで、選択/記述、合わせて17問です。5～6分程度ですが、ぜひお時間を分けていただければと思います。

この調査は、京都芸術大学大学院 芸術研究科 芸術環境専攻 学際デザイン研究領域の研究チームに所属する、佐藤隆彦によるものです。

研究チームは5名であり、共同研究として「南魚沼市八海山麓地域の風土」を研究する一方で、各個人でもそれぞれのテーマをもって研究活動を行っているところです。私、佐藤隆彦は南魚沼に残る「**里山伏**」の文化資産的価値等について探求しているところです。

参考： [【共同研究と個人研究の概要】](#)

収集する回答は個人が特定できないよう、また、職務上・私生活上のご迷惑がかからないように、厳重に管理・お取り扱いをし、本研究以外での活用や公表は致しませんことお約束いたします。

お問い合わせ先：kouta.no.yodare@gmail.com（佐藤隆彦）

■ 実施期間

10/20～12/10の間

■ 方法

Googleフォームにて調査

（なお、フォームへの回答が困難な方に対しては、調査者が紙面で聴取し、回答を代理入力した。）

■ 対象

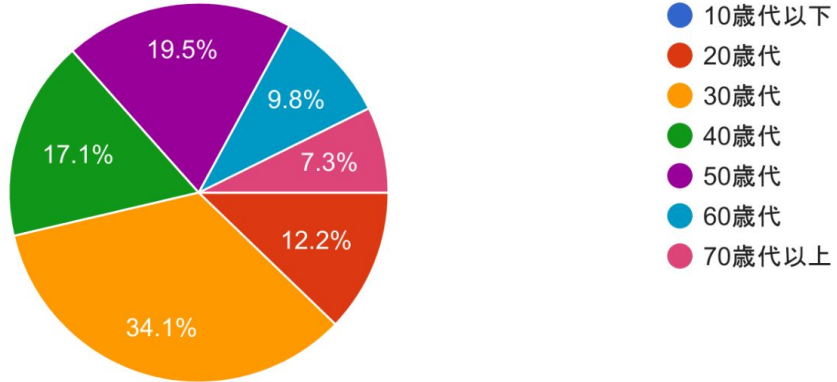
八海山麓地域に在住・在勤など、地域に所縁のある方々

【アンケート調査の目的】

- ・個人への聞き取り以外に、世代等を超えた、広く一般的な認識等について理解すること
- ・地域住民が考える、「八海山麓地域だからこそのらしさ」についての考えを知ること

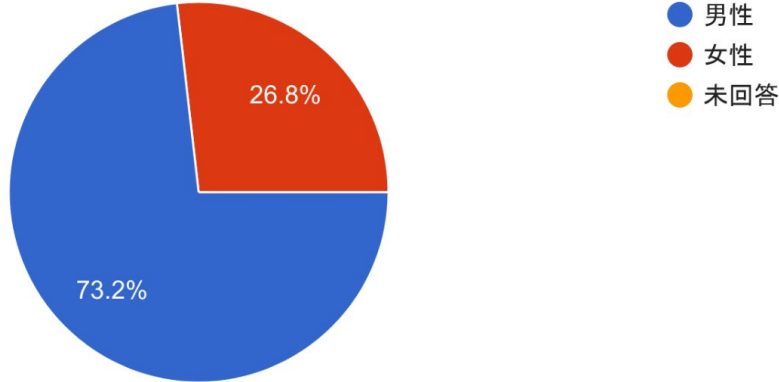
Q1 はじめに年代を教えてください。

41 件の回答



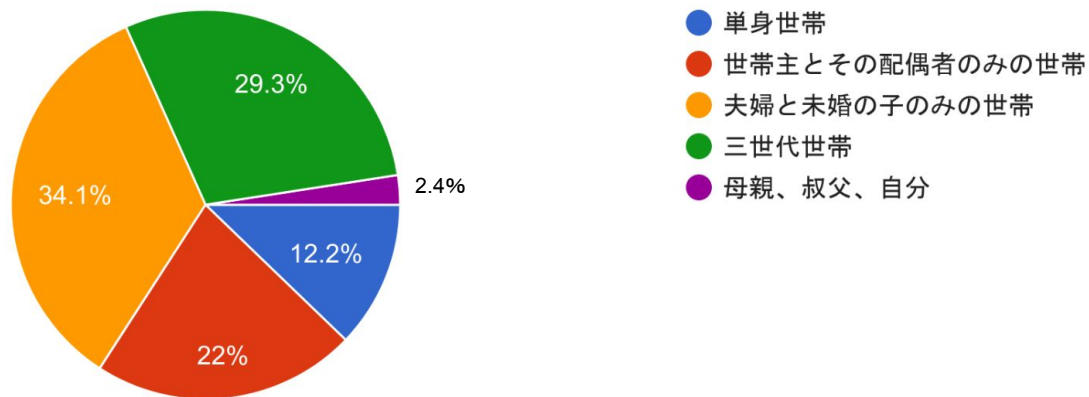
Q2 性別を教えてください。

41 件の回答



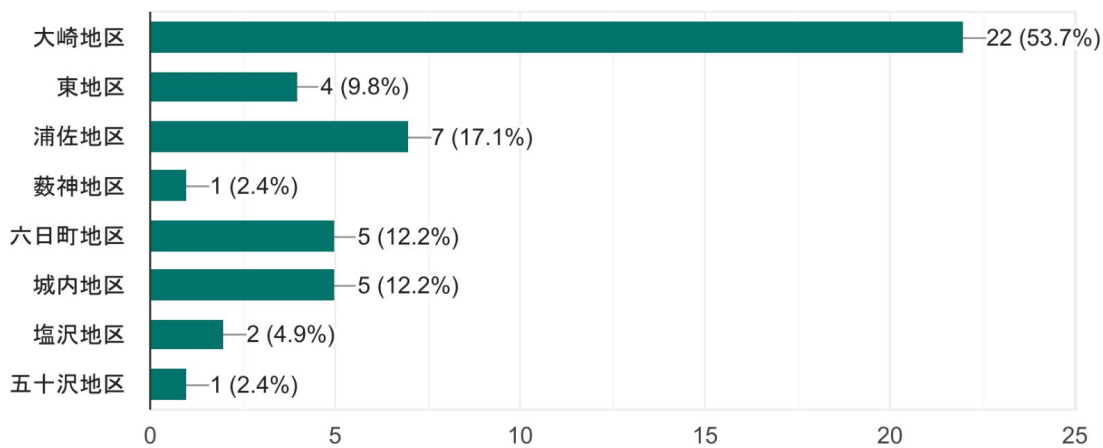
Q3 世帯構成を教えてください。

41件の回答



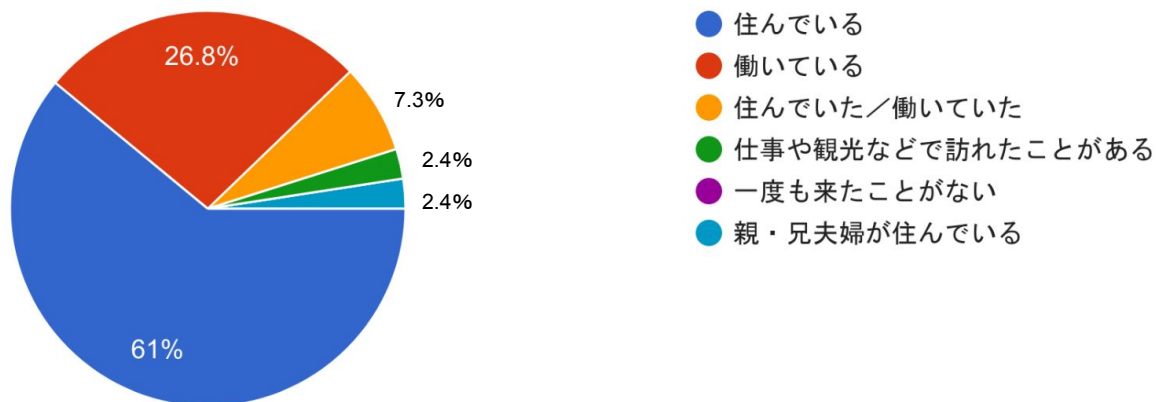
Q4 八海山麓地域のうち、関係性の強い地区を教えてください

41件の回答



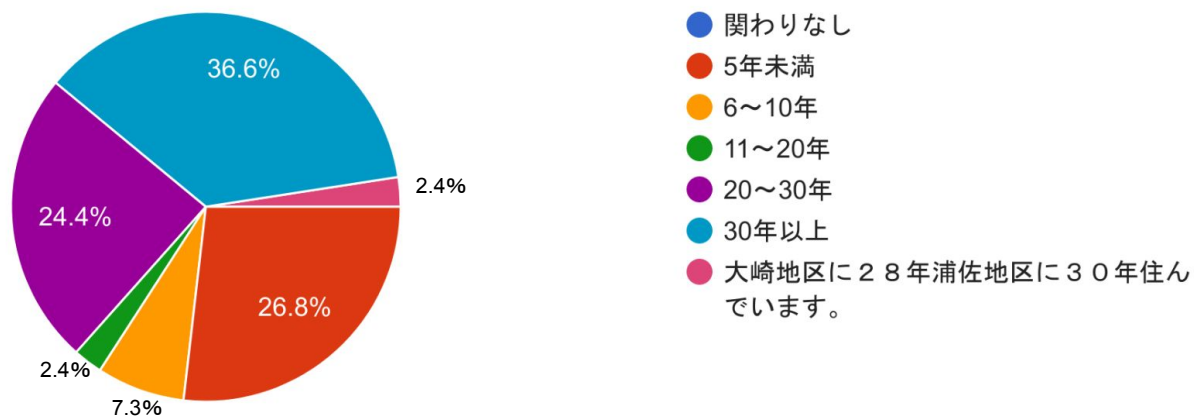
Q5 地域との関わりについて教えてください ※複数該当する場合は上段の項目を優先してください

41 件の回答



Q6 Q5で回答した地域との関わりの年数について教えてください

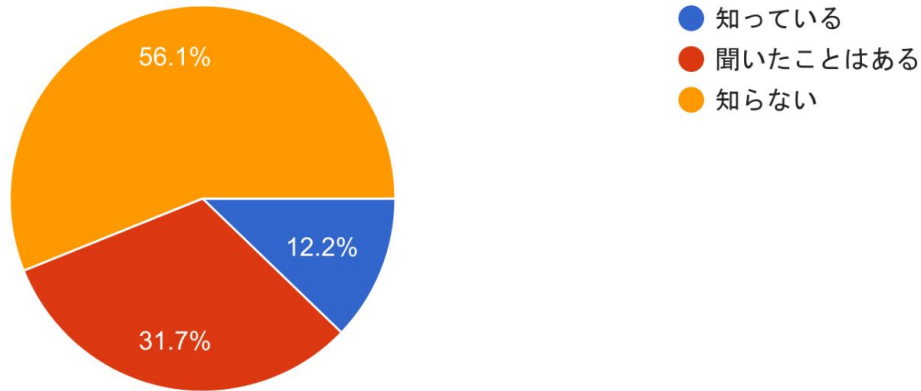
41 件の回答



Q7

南魚沼は「里山伏」（山伏）が根強く残る地域ですが、「里山伏」（山伏）を知っていましたか？

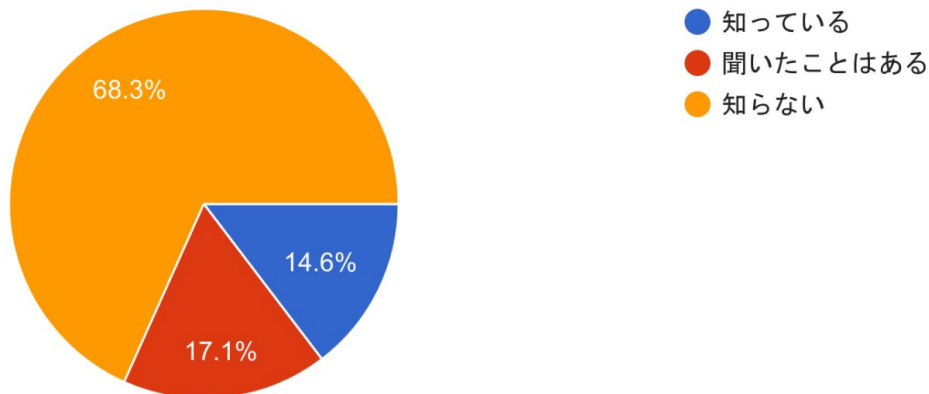
41 件の回答



Q8

「里山伏」は南魚沼と高知県にしか残っていないと言われていますが、地域の中でどのような形(職業)で暮らしているか知っていましたか？

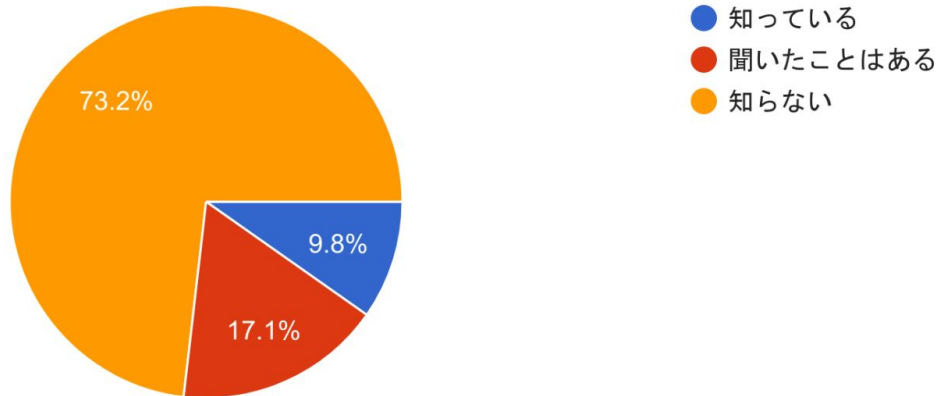
41 件の回答



Q9

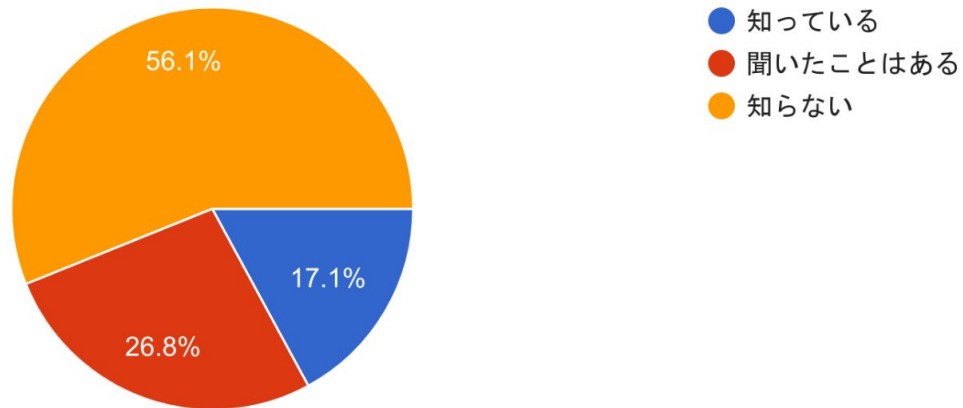
南魚沼は全国的にみても多くの修験道(山伏)寺院が残る珍しい地域だということを知っていましたか？

41 件の回答



Q10 修験寺院の住職は、「法印様」又は「山伏様」と呼ばれていますが、知っていましたか？

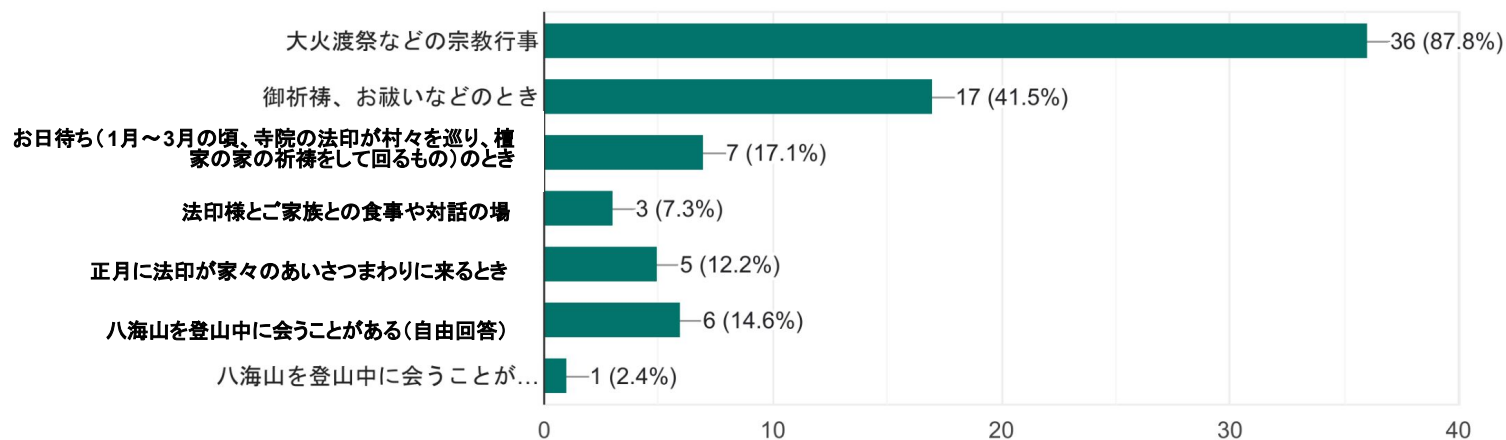
41 件の回答



Q11

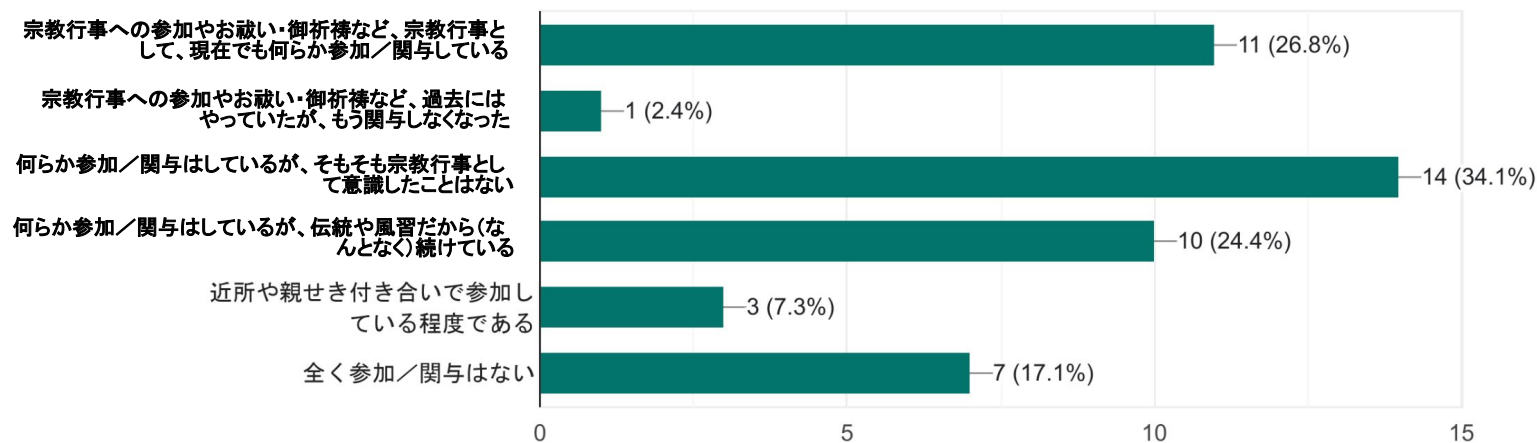
地域の中で、里山伏や法印様の姿を見る行事等で実際に知っているものを教えてください(複数回答可)

41件の回答



Q12 地域社会の中における宗教行事等への関与について教えてください(複数回答可)

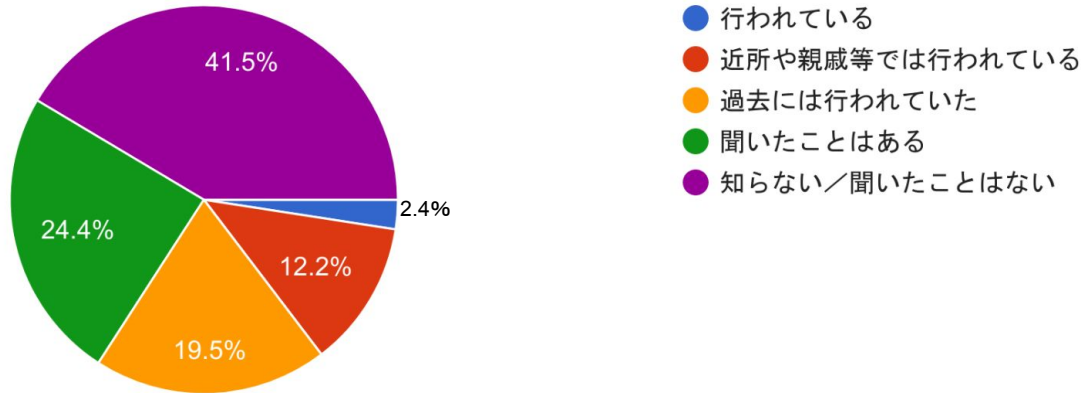
41件の回答



Q13

修験寺院の住職(法印様)などが、御祈禱やお祓いなどの際にご自宅に来てご家族を交えて懇談をする(又は寺院に参じて懇談をする)ことはありますか

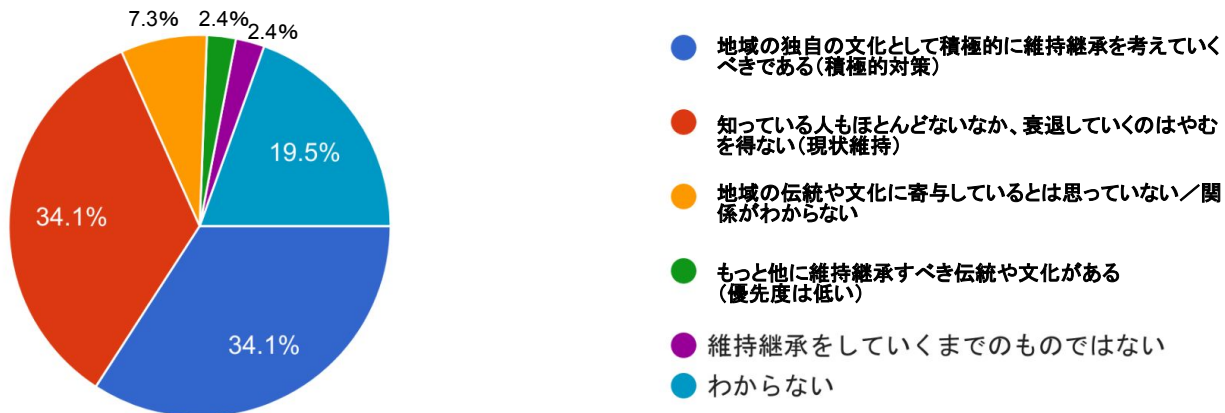
41件の回答



Q14

南魚沼の「里山伏」について、地域の文化資産として未来に向けて維持継承を図っていくことについて、お考えに近いものを教えてください。

41件の回答



Q15「里山伏」や彼らの地域における姿の一つである「寺院の住職(法印さん)」について、思うことがあればお寄せください。

(自由回答)

- ・法事の際に説法をしていただき、良いと思いました。
- ・地鎮祭等のお祓いには欠かせないものと考えている。
- ・南魚沼における里山伏は八海山麓地域以外にも存在する
- ・なし
- ・全く自分のこととして考えたことがなかったため、申し訳ないのですが、特に何も思いません。
- ・全国的にみても珍しい地域文化であるという認識がありませんでした。
- ・大崎院様があったけど、住職がお亡くなりになって、この部落からは山伏は消えた。
- ・行事のたびに出てきてくれていた
- ・この部落で山伏といったら大崎院さんだけど、去年亡くなってしまった。龍谷寺や神主さんと一緒にいろいろな行事に出てきてくれていたけど、そういう姿が見られなくなった。
- ・近所にはいない
- ・浦佐地区ではあまりきかない

Q16 八海山麓地域の「この地域だからこそそのらしさ」はどんなところにあると思いますか。
(自由回答)

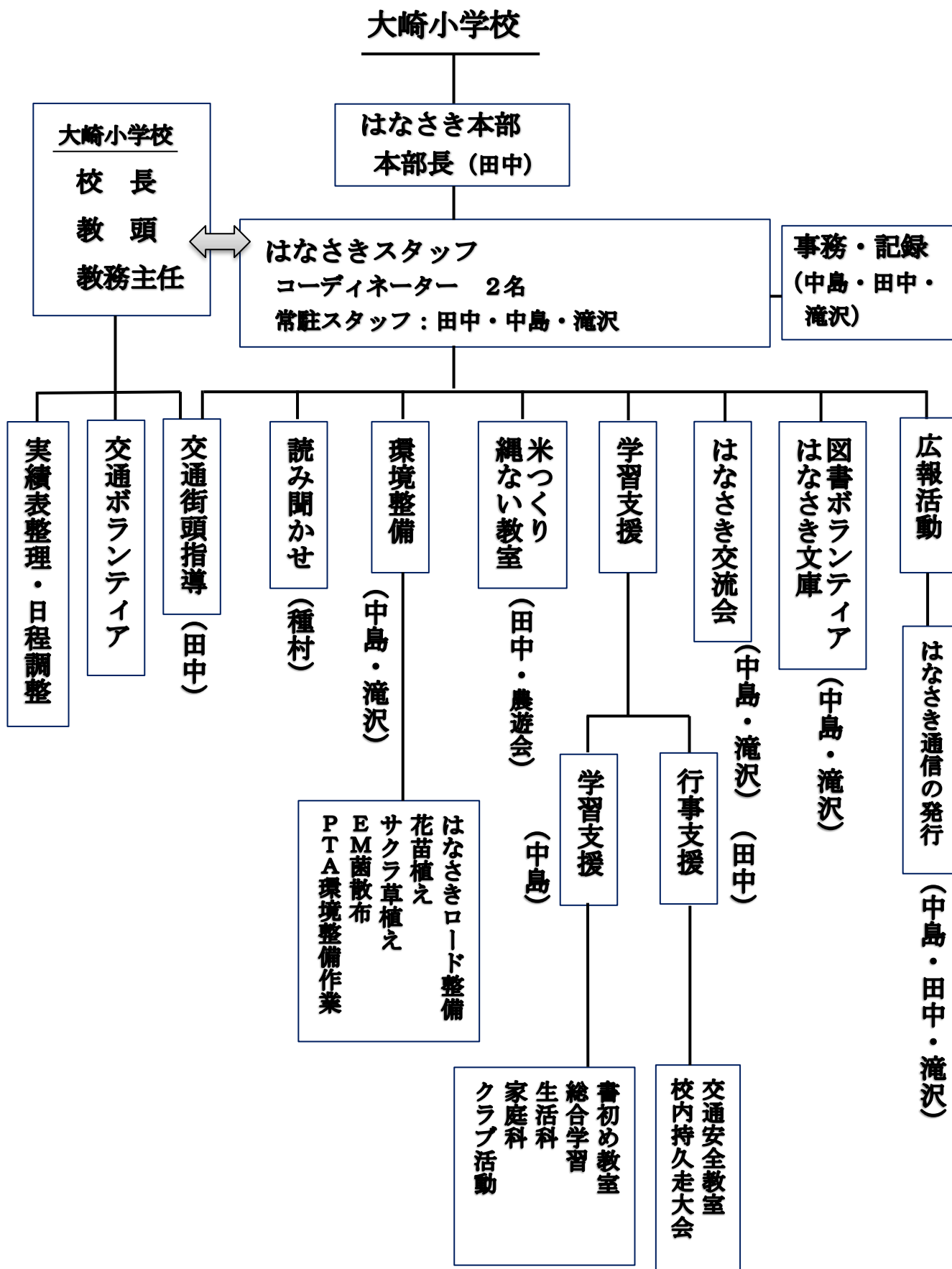
- ・伝統や文化を地元の人が支えている
- ・その土地との結び付きが強い
- ・足を運びにくい(情報、交通)
- ・自然に関すること(山、水、米など)に注目が集まる
- ・素晴らしい伝統や文化があるにも関わらずアピールや発信する機会が少ない
- ・厳しい自然環境の中で暮らしており、決して傲ることなく、逆境にも耐える粘り強い人間性とお互いを思いやる心を持っている。
- ・関心がないので分からない。
- ・豪雪地で住みにくい。八海山は峻烈
- ・わかりません
- ・大崎地域は八海山からの湧き水により、水が綺麗で豊かな地域です。その水によって発展も食文化も影響を受けてきたところですよ。
- ・火渡りの行事
- ・未だに地域全体で伝統行事を守ろうとする思いが強いと感じるところ
- ・四季と共存できること。
- ・八海山麓地域の文化はわからない
- ・火渡り祭、山伏の方が八海山を登っている光景
- ・山の景色がきれい、スキー場がありウィンタースポーツが楽しめる
- ・すみません。分かりません。
- ・よくわかっていない。
- ・雪深い地域であり、良くも悪くも我慢をしまいがちな地域性があると思う。
- ・つながりの強さ
- ・祭礼が多い部落です。いつも祭りをやっている。
- ・この部落ということ言えば、祭りとかの行事をみんなで一生涯懸命やっという意識が強いこと。だからこそその結束力だと思う。職人の町でもあるので歳の割には勢いのある人が多い。
- ・八海山に関わる行事
- ・浦佐で言えば裸押し合い祭り
- ・人間味のよさ
- ・翁式三番、太鼓、小学校での鼓笛隊

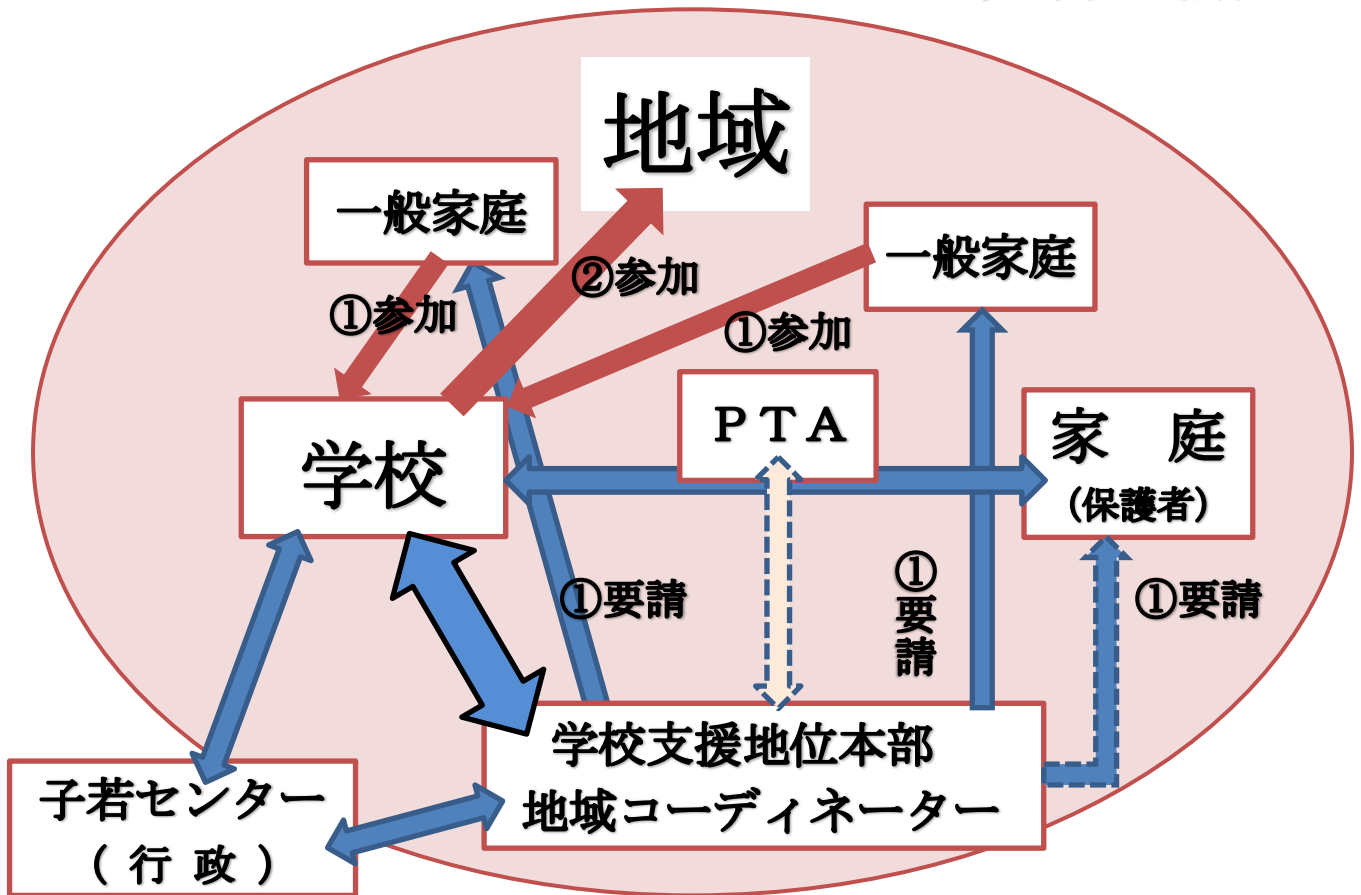
Q17 八海山麓地域の独自の風土や文化について、ご意見や思うことがあればお寄せください。

(自由回答)

- ・当たり前のように過ごしていると、八海山麓地域の独自の風土や文化についての情報を得る機会が少ないので、地元の人でも知らないことが多い。世代が下がるにつれ、そういったことを知る機会が少ないと思うので、若い世代に知ってもらうことで風土や文化が守られるように思う。
- ・里山伏がこの地域に特徴的とのことで、八海山での修行も含め、この地域独自のものが、今後も続いていくと良いと感じました。
- ・御嶽山に八海山神社があり、八海山と御嶽山の開基者が同一では？王滝村、御嶽山周辺にも里山伏がいるのでしょうか？もしくは、江戸時代の御岳講の先達を山伏が行っていたと思いますが、関連がわかれば面白いと思います。
- ・大崎地区も人口減少で、以前のようなお祭りや地域行事が出来なくなっていることが残念です。
- ・長年、南魚沼に住んでいながらこのような歴史があることを知らなかった。もっと広く発信してほしい。
- ・もっと詳しく知りたい、体験したいと思っている。
- ・この地域の独自の風土や文化であるという認識を市民自身が持って、守っていかなければ衰退して消えてしまうということを感じます。
- ・八海山があったその麓で栄えてきたところでもあるので、信仰、それと祭りが特徴でないか。他の地区でこんなに年中やっているところはないと思う。
- ・山々に囲まれた地域で、集落ごとにまとまっているという地理的な配置にもなにか文化を形作るものがあるのではないか。
- ・お米だけでなく、スイカや大崎菜などの生産。

令和4年度大崎小学校支援本部組織図





① 支援地域本部から地域へ — ボランティアの要請

- ・ 環境整備—図書整備、花壇整備、花植え、EM菌散布等
- ・ 学習支援—書初め教室、米つくりや野菜苗植え他の総合学習、家庭科、クラブ活動指導者紹介、引率補助等
- ・ 行事支援—交通安全教室、校内持久走大会等
- ・ 支援地域本部の独自事業
ボランティア会議、はなさき交流会の開催、広報活動、活動記録の掲示

② 学校から地域へ — 地域の行事へ参加

- ・ 火渡り大祭での鼓笛隊パレード
- ・ 地区文化展へ作品展示
- ・ 地域づくり協議会との連携
交通安全ポスターの街頭掲示、新1年生に防犯ベルの贈呈、介護施設との交流
- ・ 学校行事へ案内
運動会、学習発表会、その他の行事案内

地域ぐるみで地域の希望である子供たちを育てよう ～大きく 咲かそう 希望の花を～

新潟県南魚沼市

活動名

大崎小学校学校支援地域本部

関係する学校

大崎小学校

活動区分	基本データ			
	学校支援 地域本部	コーディネーター数 1人	ボランティア登録数 144人	開始年度 20年度
放課後 子供教室	コーディネーター数	子供の平均参加人数	年間開催日数	補助の有無
	実施場所		開始年度	放課後児童 クラブとの連携
コミュニティ スクール	指定日	委員数	児童生徒数	学級数
その他	※H24年度の実績(補助の有無についてはH25年度の状況)			

活動の概要

「できる時に、できる人が、できることを」を合言葉にして、地域の人材を教育活動の支援に生かすことを目的に活動を展開している。

活動名を「はなさき活動」とし、拠点を校内に置き、「はなさき本部」として、支援活動の連絡調整を行っている。地域のボランティアを募ったり、地域の諸団体との連携協力を図ったりして、学校が必要な地域の力を教育活動に生かすよう配慮してきた。

〈主な活動〉

- ・安全指導支援(安全パトロール隊の交通安全教室支援、持久走の監察員等の学校行事での支援など)
- ・授業支援(国語、算数、家庭科、生活科など)
- ・体験学習支援(地域の人材を生かした米づくり活動、地域の産物である大崎菜栽培、大前神社の祭り調査や地域芸能の紹介等)
- ・環境整備支援(花壇の整備、入学式・卒業式に飾る花の栽培補助など)
- ・図書の読み聞かせ支援(毎週金曜日。読書週間のおすすめ本の紹介や、クリスマスイベントなど読み聞かせ以外の活動も実施)
- ・図書ボランティアによる図書修理と整備
- ・地域諸団体との連携による地域行事への支援・協力
- ・月1回「はなさき通信」の発行と全戸配付

特徴

〈特徴的な活動内容〉

地域の高齢者を中心に、子供と一緒に昔の遊びやもの作り活動を行う「はなさき交流会」を年5回実施してきた。ロングの昼休みを使い、遊び・もの作り(2会場)・読み聞かせなど4つの活動を設定し、子供たちが自由に選んで活動に参加するようにした。平成25年度は5年目を迎える。

〈実施に当たっての工夫〉

- ・4月にボランティア打合せ会を実施し、年間の取組や内容について協議する機会を持っている。学校職員、ボランティア代表、本部スタッフがそろい、年間の予定を確認している。
- ・PTA総会やPTA研修会にも本部は参加し、取組の紹介やボランティア参加の呼びかけをしている。
- ・「はなさき通信」を発行し、月ごとの予定や活動の様子について、写真や文章で知らせている。学校だよりとともに全戸配付している。地域にもはなさき本部の活動が理解されてきている。
- ・地域諸団体の青少年育成に関わる取組と連携し、行事案内状づくり、交通安全ポスターづくり、地域文化祭への参加などの子供たちの地域行事への参加を呼びかけ、学校と地域の連携を図っている。

事業を実施して

ボランティアの数も一定し、活動の動きがスムーズになってきている。学校への関心も高まり、地域の方が気軽に支援してくれている。

子供たちの反応もよく、丁寧な挨拶の様子が見られ、学校へ足を運ぶことが心地良くなっている。

その他

ボランティアの呼びかけに対して、必要なことには力を貸してもらえ。長続きさせるためには、コーディネーターを中心に、学校との連携を図りながら進めていくことが必要である。本部スタッフとして地域の公民館長に来ていただいている。公民館長は、地域との連携には欠かせない存在である。



環境整備支援(さくら草植え)



はなさき交流会(ものづくり・おりがみ)

おおさきの たからもの (仮称) ー八海山と伝統文化編ー



- 「地域の人自身が知り、地域の人々の文脈や言葉で次世代に語り継ぐこと」
- 「郷土に誇りを持ち、郷土の自慢として話し、伝えられるきっかけになること」
- 「地域の自慢を発見するまなざしを育むこと」

註:A5版冊子を想定している。



霊峰 八海山

この地の暮らしや風土と強く結びついていて、霊峰と言われるとおりに、古くから信仰の対象として仰がれてきた山です。

八海山信仰は、神様と仏様が混ざり合うかたちをとりながら発展してきました。

地域の象徴

八海山信仰や修験道に由来する 伝統や習俗が根強く残るまち

山岳信仰と身近な神々 大前神社御九日祭

八海山は田の神でもあり、秋の刈り入れが終わると山の神として山に帰ります。幣束となったヤマダイショウを立て、湯立て神事を行います。田植えの時には田んぼに立てて、豊年豊作を祈ります。



修験道と山伏

修験道は山岳崇拜により、山岳修行によって力を得て、自他の救済を目指す日本独自の宗教です。

修験道を実践する者を山伏と呼び、里に定着する「里山伏」は、南魚沼と高知県の一部にしか残っていないと言われています。



水に始まり、火に終わる 八海山の修業

大寒の滝行に始まり 秋の火渡りに終わる

大寒の1月28日～2月3日の節分祭まで、八海山大崎口里宮の不動滝で、雪中の御滝に打たれての水垢離（みずごり）修行が始まります。

10月20日の火渡大祭で一年の修業の終結を迎えます。





暮らしの中に根づく祭礼



6月第一日曜日
龍谷寺開運観音大祭
(八海山 龍谷寺)

8月14日
「翁式三番」奉納

8月15日
大前神社 例大祭
(大崎神社)

新潟県指定無形文化財



10月19日
大祭前夜御神灯祭
10月20日
八海山大崎口火渡大祭
(八海山尊神社)



石動山 三寶院
石動住職

地域に生きる里山伏

地域に生きる里山伏の一つの姿として、修験寺院の法印という生き方があります。

彼らの地域社会での役割や価値の根底には、地域・家（家族・マキ）・個人に対して、日常生活の中でのご祈禱やお祓いなどをおした「対話」による生活問題の解決や個人・共同体の救済があります。

里山伏は、対話による人づくり・地域づくりを担っています。



註：写真掲載をそれぞれ許諾済み(左上及び中・大和町観光協会、 左下・八海山尊神社、右 3枚・三寶院)

大崎の自慢!

大崎が発祥の地 八海山の湧水と大崎菜



およそ300年前の江戸時代に伝わった小松菜を改良した菜っ菜の一つで、大崎区地区で栽培が始まったことから「大崎菜」と呼ばれるようになりました。



八海山の麓から湧き出ている「滝谷の清水」を利用して、昔から栽培されています。



雪深い大崎に欠かせない伝統の野菜です。

大崎だけに残る風習 新年の「ものもー」、「どうーれい」

ものもー!

どうーれい!



大崎だけに残る風習の一つで、正月に里山伏らが集落の住民に対して年始のあいさつまわりを行います。その時に子どもがお供について、一緒にまわります。

この際、お供の子どもからの「ものもー」、対して家主らの「どうーれい」のかけあいは今では南魚沼でも大崎にしか残っていません。



地域を調べてみよう

自分の住んでいる地域には、どのような古いものが残されているでしょうか。

どんな地域かな？どんな自然や風景がある？

どんな伝統がある？昔はどんなだった？

わたしが住んでいるところは…

八海山をかいてみましょう！

気づいたこと

住んでいる地域の何月（どの季節）が一番好きですか？
それはどうしてですか？

自分の住んでいる地域の特ちょうはなんだろう…？
昔から残っているものには、どんなものがあるだろう…？
（例：行事・まつり、食べ物、自然、建物、文化…）

①

②

③

みんなで調べてみよう

住んでいる地域の特ちょうあること、じまんでできることなど、グループで協力して詳しく調べよう！

調査タイトル

もっと詳しく知りたいこと

調べる方法

まちの人に聞いてみよう！

さん

さん

他の地域と比べてみよう！

(比べる地域)

(自分の地域とのちがい)

(比べる地域)

(自分の地域とのちがい)

地域の特ちょうってなんだろう？

大崎地区の宗教的祭礼に係る主な年中行事

1/15	塞ノの神	5/8	花祭(甘茶供養)	8/15	海土ヶ島鎮守様祭
1/28-2/3	八海山寒行	5/8	水尾薬師堂祭	8/16	穴地新田鎮守様祭
2/2	火神祭(大崎院)	6/第一日曜	開運十一面観音大祭(龍谷寺)	8/27	大崎諏訪神社(上・原)祭
2/3	節分祭(八海山社務所)	7/1	八海山山開き	8/27	穴地新田観音様祭
2/4	秋葉祭	8/1-12	おせがき(龍谷寺)	8/下旬	公民館大崎分館行事
2/11	ねはんえ(ダンゴまき龍谷寺)	8/第一日曜	柳古観音様祭	9/1	八朔祭
3/21	百八灯	8/9	穴地観音様祭	9/第一日曜	柳古稻荷神社祭
4/20	春季大祭(八海山社務所)	8/14	穴地鎮守様祭	10/20	八海山火渡祭
4/29	春祭(大崎院)	8/14-15	大崎大前神社祭	11/3	文化祭
4/第四日曜	祖庭堂霊祭(穴地新田)	8/14-15	今町新田鎮守様祭	11/8	水尾薬師堂祭
4/下旬	鯉のぼりダム祭り	8/14-15	水尾八海神社祭	12/8	成道会(龍谷寺)
5/5	塔の山祭り				

出典: 大崎商工会作成の日めくりカレンダー台紙「2019 大崎商工会 郷土の暦」大崎商工会、2019